

# 西 河 原 遺 跡

1992.3.

兵庫県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、神戸市西区玉津町西河原に所在する『西河原遺跡』の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査ならびに整理作業は、兵庫県土木部神戸土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 発掘調査は、平成元年度に実施した。調査は1989年12月6日から同16日までの実働7日間を費やした。
4. 本書で示す標高値は、兵庫県土木部神戸土木事務所設定のB. M. を使用した値で、方位は磁北である。
5. 発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 調査第2課 渡辺 昇・久保弘幸が担当した。
6. 遺構写真は調査員が撮影した。ただし、図版1の空中写真については国土地理院撮影のものを使用した。
7. 整理作業は、平成3年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
8. 執筆は調査担当者が行った。執筆分担は本文目次のとおりである。編集は伴 悅子の協力を得た。
9. 実測図は、断面によって器種を分けている白抜きは弥生土器・土師器、黒塗りは須恵器を表している。
10. 本報告にかかる出土遺物ならびにスライドなどの資料は、現在兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）ならびに兵庫県埋蔵文化財調査事務所魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）で保管している。

# 本文目次

## 例言

I.	はじめに	渡辺
1.	調査に至る経緯	1
2.	確認調査の経過	2
3.	整理調査の経過	3
II.	歴史的環境	渡辺 5
III.	調査結果	久保
1.	調査の方法	9
2.	調査結果	9
3.	小 結	10
IV.	出土遺物	渡辺
1.	弥生土器	14
2.	弥生時代末から古墳時代の土器	16
3.	古墳時代後期の須恵器	22
4.	歴史時代の土器	27
V.	おわりに	渡辺 29

# 挿図目次

第1図	西河原遺跡の位置	iv
第2図	西河原遺跡遠景	2
第3図	調査風景	3
第4図	整理作業風景	4
第5図	西河原遺跡遠景	5
第6図	西河原遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第7図	天王山から見た明石川下流域	8

第8図	確認調査（トレンチ）配置図	11
第9図	3・4・5トレンチ 土層断面図	12
第10図	7トレンチ 土層断面図	13
第11図	弥生土器 実測図	14
第12図	弥生土器 拓本	14
第13図	土師器 実測図（1）	15
第14図	土師器 拓本	16
第15図	土師器 実測図（2）	17
第16図	土師器 実測図（3）	18
第17図	土師器 実測図（4）	19
第18図	土師器 実測図（5）	20
第19図	製塙土器 実測図	21
第20図	製塙土器 拓本	21
第21図	須恵器 実測図（1）	23
第22図	須恵器 実測図（2）	24
第23図	須恵器 実測図（3）	25
第24図	須恵器 拓本（1）	26
第25図	須恵器 拓本（2）	26
第26図	歴史時代遺物 実測図（1）	27
第27図	歴史時代遺物 実測図（2）	28
第28図	瓦 実測図	28

## 表 目 次

第1表 弥生土器観察表.....	30
第2表 土師器 観察表.....	31
第3表 須恵器 観察表.....	38
第4表 歴史時代の遺物観察表.....	42

## 図 版 目 次

- カラー図版1 (上) 調査地全景  
(下) 7・9トレンチ東壁
- カラー図版2 (上) 出土遺物  
(下) 出土遺物(土師器)
- 図版1 西河原遺跡空中写真(国土地理院撮影)
- 図版2 (上) 調査地遠景(南から)  
(下) 調査前の状況(1~3トレンチ付近・北西から)
- 図版3 (左上) 1トレンチ(東から)  
(右上) 3トレンチ(東から)  
(下) 4トレンチ北壁
- 図版4 (上) 6トレンチ北壁  
(下) 7トレンチ東壁
- 図版5 7・9トレンチ東壁
- 図版6 (上) 埋め戻し風景  
(下) 調査地遠景(南から)
- 図版7 (上) 出出土師器  
(下) 弥生土器(1)・土師器(1)
- 図版8 (上) 弥生土器(2)  
(下) 土師器(2)
- 図版9 土師器(3)

- 図版10 土師器（4）  
図版11 土師器（5）  
図版12 土師器（6）  
図版13 土師器（7）  
図版14 土師器（8）  
図版15（上）製塙土器  
（下）須恵器（1）  
図版16 須恵器（2）  
図版17 須恵器（3）  
図版18 須恵器（4）  
図版19 須恵器（5）  
図版20 歴史時代出土遺物（1）  
図版21 歴史時代出土遺物（2）



第1図 西河原遺跡の位置

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

西河原遺跡は、神戸市西区玉津町西河原に所在する遺跡である。明石川左岸に位置し、東側の明石川によって形成された微高地上には新方遺跡をはじめ多数の遺跡が立地している。西河原遺跡は神戸市教育委員会発行の神戸市文化財分布図（昭和62年3月刊）には登載されていない遺跡であるが、地元の考古学研究者・爱好者には古くから弥生土器が採集される遺跡として知られていたようである。昭和63年度の冬季の明石川の水嵩の下がった時期に包含層が露出し、多量の土器が採集されるようになった。そのため、地元考古学研究者からその旨の連絡があった。

兵庫県土木部神戸土木事務所では明石川の河川改修工事が計画され、下流から順に工事が実施されていた。平成元年度に西河原遺跡部分の改修工事が予定されていたことから、調査時期・方法などについて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所と兵庫県土木部神戸土木事務所の間で協議が交わされた。河川改修であることから、渇水期に調査を行い、本体工事を終了後に行うこととなった。西河原遺跡の遺構の有無や広がりが定まっていないことから、調査期間を算出することは出来なかつたので、まず確認調査を実施することとなった。平成元年度の調査事業量が多く速やかな対応が困難であったが、調査と調査の合間に確認調査を行うこととなった。

## 2. 確認調査の経過

確認調査は冬季の渇水期に行うこととなり、急遽調査に対応することとなった。調査は平成元年12月6日から16日までの実働7日間を費やした。

はじめに遺跡の存在の有無と、遺跡が確認された場合の範囲確認調査を実施することとなった。河川の堤防施工や河川管理の上から、調査対象地はかなりの盛土が予想された。また、遺跡の性格が不明であることや、砂地であることの理由から、確認調査は機械掘削を主としたトレンチ調査にすることとした。調査対象地（明石川によって削られた面の観察から決定）の中央を山陽新幹線が通っている。その軌道管理部分を除いて、ほぼ15~20m間隔でトレンチを設定した。北側から順にトレンチ1・トレンチ2と冠して調査をトレンチ6まで実施した。幅は当初4mとし平面調査を心掛けたが、包含層や地山が深いことから、断面観察を主とした調査に切り変えた。そのため幅は8m前後となった。トレンチの長さは、設定した地形などにより差がある。6本のトレンチの調査の結果、2トレンチでは河道内の2次堆積の包含層から遺物が出土したものの、明瞭な遺構や生活面は確認できなかった。水田土壤を検出したにすぎないが、小畦畔は1か所も確認できなかった。

そのため、断面に包含層が認められる部分を中心にトレンチを設定した。トレンチ7で、トレンチ6に直交するように設定し確認したところ、多量の遺物が出土した。トレンチ7と名を与えていたが、基本的に断面観察だけである。平面的な調査は全く行っていない。包含層も南側まで続いていることが確認できた。しかし、北側・東側には包含層が続いていることから面的に広げることにした。

トレンチ7の北半の東側の面的に拡張した部分をトレンチ8とした。須恵器がまとまって出土し、遺構面と思われる微高地の存在の可能性が考えられた。しかし、精査した結果、遺構は確認されず、遺構の乗る微高地はさらに東側か、すでに削平されたものと想定された。

ただ、包含層は残っていることから、包含層部分については結果的には遺物を採集することを目的として全面調査を行った。その結果、遺構はやはり確認されず遺



第2図 西河原遺跡遠景

物包含層を確認したにとどまった。しかし、包含層も時期差があり、トレンチ6～9間は須恵器を中心とするものであるが、河川敷の包含層は弥生時代後期から古墳時代初頭のものである。

調査段階で、周辺についても分布調査を実施したところ、上流部で一部包含層を確認したが今回調査部分に比べると包含量が粗密である。ただ、遺物の散布は広域であり、相当上流部まで確認された。

#### 発掘調査の体制

兵庫県埋蔵文化財調査事務所

##### 調査事務

所長	大江 剛
副所長	村上 紘揚
副所長	才木 繁
総務課長	小池 英隆
主査	池田 正男
主査	田中 豊英

##### 調査担当 調査第2課

主任	渡辺 昇
技術職員	久保 弘幸
作業委託	株式会社和幸建設 現場代理人 田中 昭二

### 3. 整理調査の経過

発掘調査が確認調査を主としたもので現場事務所も設けていなかったことから、整理調査は西河原遺跡では全く実施していない。調査担当者が次の発掘調査現場等で水洗い・注記作業を行ったのち、平成3年度に単年度で兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行った。

整理調査は、接合作業から開始しレイアウト・報告書刊行までの作業を兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で、伴 悅子を中心に実施した。出土遺物写真の一



第3図 調査風景

部は日の出カメラに委託して撮影したものであるが、大半は渡辺が撮影した。

#### 整理調査の体制

兵庫県埋蔵文化財調査事務所

##### 調査事務

所長	内田 隆義
副所長	駒井 功
副所長	才木 繁
総務課長	田中 豊英
整理普及課長	松下 勝
主査	小川 良太

##### 調査担当

社会教育・文化財課

主査	渡辺 昇
----	------

##### 調査第2課

技術職員	久保 弘幸
嘱託員	伴 悅子



第4回 整理作業風景

## II. 歴史的環境

西河原遺跡は、現在の明石川の川底から東側護岸部分に広がる遺跡で、神戸市西区玉津町西河原に位置している。大雨時などに土器が採集されることで知られたところで、考古マニアによる表面採集が古くから行われていたようである。

明石川河口から約1.5km近く上流に位置している。河口との中間付近で伊川が合流している。標高4m前後と低い平野部分である。調査では明瞭な遺構は検出できなかつたが、トレンチ7で微高地の端部に相当する地点を調査していることから、東側に遺跡が広がったものと思われる。

西河原遺跡は、弥生時代中期からの遺跡であるが、周辺では旧石器時代からの足跡が確認されている。丹波の七日市遺跡・板井寺ケ谷遺跡のように、遺構が検出されたり火山灰が伴って確認された遺跡はないが、単独に確認されたり、表面採集された遺物は県下でも多い方であろう。神出地区の丘陵上の溜池で多く採集されている。野々池や上喰池などから、ナイフ形石器や尖頭器が出土している。また、明美丘陵上の西脇遺跡や東側垂水丘陵の青池遺跡・池上口ノ池遺跡でも出土しており、最近の発掘調査でも数点出土している遺跡が増加している。

縄文時代は遺跡の数は少ない。有舌尖頭器出土地に加えて、最近の調査では大畠遺跡・南別府遺跡・玉津田中遺跡などから遺物が出土している。古く知られている遺跡としては元住吉山遺跡・大歳山遺跡がある。播磨と摂津の国境となる境川遺跡からは押型文土器が採集されている。

弥生時代になると、急激に遺跡数は増加する。縄文時代晚期から続く玉津田中遺跡でも前期の土器と共に、前期の住居跡も確認されている。微高地の検討などの成果も加えて集落の構造が明らかになりつつある兵庫県を代表する弥生時代の遺跡である。西河原遺跡からは北西の方向に立地しており、約3km離れている。この間の平野部はほぼ全域弥生時代の遺跡が存在している。玉津田中遺跡の南側には居住遺跡がさらに



第5図 西河原遺跡遠景



第6図 西河原遺跡の位置と周辺の遺跡

- 1 西河原遺跡
- 2 上池遺跡
- 3 新方遺跡
- 4 今池尻遺跡
- 5 潤和遺跡
- 6 南別府遺跡
- 7 北別府遺跡
- 8 天王山遺跡
- 9 天王山古墳群
- 10 白水瓢冢古墳
- 11 白水遺跡
- 12 水谷遺跡
- 13 今津遺跡
- 14 №145散布地
- 15 出合遺跡
- 16 王塚古墳
- 17 吉田遺跡
- 18 森友遺跡
- 19 吉田南遺跡
- 20 和坂遺跡
- 21 船上城跡
- 22 明石城跡
- 23 上ノ丸貝塚

南には出合遺跡が立地している。東側には居住小山遺跡・二つ屋遺跡があり、両遺跡の南側一帯には高津橋岡・今津遺跡がある。さらに南側には玉津田中遺跡と比肩される大集落の新方遺跡が存在する。前期から後期へ続く母集落で、玉津田中遺跡の方形周溝墓群に対して、貼石を施した墳丘墓が確認されている。新方遺跡と西河原遺跡は東西に接しており、遺跡の境界が明らかでない。今のところ明石川河床を中心に西河原遺跡と呼称されているが、東側にも広がっていることは今回の調査成果からでも明確である。西河原遺跡の対岸（西側）には明石郡衙の可能性の高い吉田南遺跡が位置している。後期から古墳時代初頭にかけての大規模な遺跡である。明石川流域では唯一の庄内型壺を保有する遺跡である。また、その北西には前期古段階の土器を出土したことで知られている吉田遺跡がある。尼崎市上の島遺跡とともに弥生人の開拓ムラとして著名な遺跡である。このように明石川下流域の平野には多くの、そして大規模な弥生時代の遺跡が存在するが、丘陵上には遺跡は構築されている。青谷遺跡・西神ニュータウン内遺跡・頭高山遺跡・狩口台遺跡や池上口ノ池遺跡などがそうである。常本遺跡・池上北遺跡などでも興味ある遺構が検出されている。ただ、これだけ遺跡が稠密に存在しているにも係わらず、銅鏃は投上鏃しか出土しておらず、神戸市でも六甲山麓とは様相を異にしている。

当遺跡周辺の古墳では、全国初の復原整備された古墳としても知られる、明石海峡を望む位置に立地する五色塚古墳が著名である。兵庫県最大の前方後円墳で、全長194mの三段築成の陪冢を伴った堂々たる姿を示している。埴輪列・葺石が施され、社会教育の場として活用されている。長持形石棺を内部主体としていると言われるが明瞭でない。五色塚古墳は前期末の古墳で、それに遡る古墳は、西河原遺跡の東側の伊川谷に立地している。天王山4号墳が最も古い古墳で、飛禽文鏡が出土している。それに続く古墳が白水瓢塚（妻塚）がある。堅田神社古墳もこの時期であろうか。また、五色塚よりやや新しい時期の明石川流域の盟主墳と思われるのが、王塚古墳である。周濠を有する前方後円墳である。前期の古墳より古い弥生時代末の墓が、玉津田中遺跡の北側の丘陵で確認されている。農地造成に伴って調査が兵庫県教育委員会によって実施されている。後期の古墳は丘陵上に多く築造されている。主体部は横穴式石室が多いが、木棺直葬の古墳も知られている。古墳時代の集落も調査例が増えている。吉田南遺跡80棟もの竪穴住居跡が調査されている。弥生時代の集落の多くが古墳時代も生活を営んでいる。新方遺跡では後期の玉作り遺跡が確認されている。滑石の工房

跡である。

奈良時代は、吉田南遺跡が明石郡術に推定されており、整然と並んだ多数の掘立柱建物が調査されている。木簡や円面鏡・石帶など官衙的な遺物が出土している。また、出合北山遺跡でも山裾と段丘上に掘立柱建物群が確認されている。西河原遺跡南東側の丘陵上には太寺廃寺がある。明石城城下町の調査でも同時期の軒瓦が出土している。奈良～平安時代の遺物は多くの遺跡で出土しているが、一般集落の状況を明確にするような遺跡はまだ調査されていない。

中世の遺跡も多数存在する。玉津田中遺跡では、庭園と考えられる一群と建物などが調査されている。木棺墓周辺（上部）に建物を構築している特殊例である。呪符木簡や祭祀遺物も出土している。鬼瓦や軒瓦も出土しており、北側の神出古窯跡群のもある。神出古窯跡群は、西側の魚住古窯跡群とともに中世播磨の窯業の中心地で、流通地との関連を考える上で貴重である。また、当時の須恵器編年の基準資料としても評価されている。周辺の遺跡でもほとんどの遺跡で当時期の遺構が確認されている。調査件数も多く、条里制や莊園の状況なども明らかになりつつある。



第7図 天王山から見た明石川下流域

### III. 調査結果

#### 1. 調査の方法

今回の確認調査対象地は、明石川左岸の堤内にあたり、明石川と山陽新幹線高架が交差する地点を中心として、上流側約60m、下流側約80mがこれに相当する。調査地付近では、従来の河川敷が、現在の明石川本流河道によって浸食され、高さ1～2mの崖面が形成されていた。現河床と浸食崖では、遺物の包含層が部分的に露出しており、盜掘の痕跡も見られた。

このような現状に則して、効率的な確認調査を実施するため、トレンチを主体とした調査方法をとり、必要に応じて、逐次拡張区を設けることとした。各トレンチの規模は、表に示した通りである。

トレンチは、調査対象範囲の北（上流）側から、順次第1～6トレンチを設定した。地層の堆積状況を明確に把握するため、いずれも現在の河川敷を横断する方向（東西）に設定した。さらに第5・6トレンチ間に、現河川敷の崖面を整形するようなかたちで、第7トレンチを南北方向に設定した。第7トレンチでは、当初設定したトレンチの範囲が、旧河道の中央部に相当したため、トレンチを南側に延長した。その結果、旧河道の縁辺にあたる沖積微高地が検出され微高地上を覆う層準から、多数の遺物の出土をみた。このため第7トレンチの微高地部の東側に拡張区を設けて、遺構の検出を試みたが、遺構は検出されなかった。

さらに、第7トレンチの旧河道部に含まれる遺物を回収するため、第8・9トレンチを設定して、掘削をおこなった。

今回の調査は、確認調査という性格上重機掘削を主体として実施し、遺物の出土が見られた場合、人力による精査をおこなうという方法で実施した。また、河川敷という調査地点の特徴から、断面観察による堆積物の検討に、より多くの注意を払った。

#### 2. 調査結果

調査の結果、確認調査範囲内では、遺物の出土はみたものの、すべて旧河道内の堆積物からの出土であり、また、遺構も明瞭には検出されなかった。

第1～6トレンチでは、旧河道ないしは沖積低地の堆積物が重層しており、古水田土壌と考えられる層準が認められたものの、畦畔・溝等の遺構は確認が困難であった。出土遺物はごく少量にとどまった。

第7トレンチでは、旧河道・微高地上の堆積物から遺物が検出されたため、トレンチの東側に1辺約10mの拡張区を設定して、面的な精査を試みたが、遺構は検出されなかった。

微高地を形成する堆積物は、硬化した洪水砂～シルトと、土壌化の進んだシルト（黒色帶）の瓦層状を呈する。壁面の精査では、遺物はまったく検出されなかった。

また旧河道部に設定した、第8・9トレンチでは、多数の遺物が回収された。

なお、各トレンチの地層断面を、第11・12図に示した。

### 3. 小 結

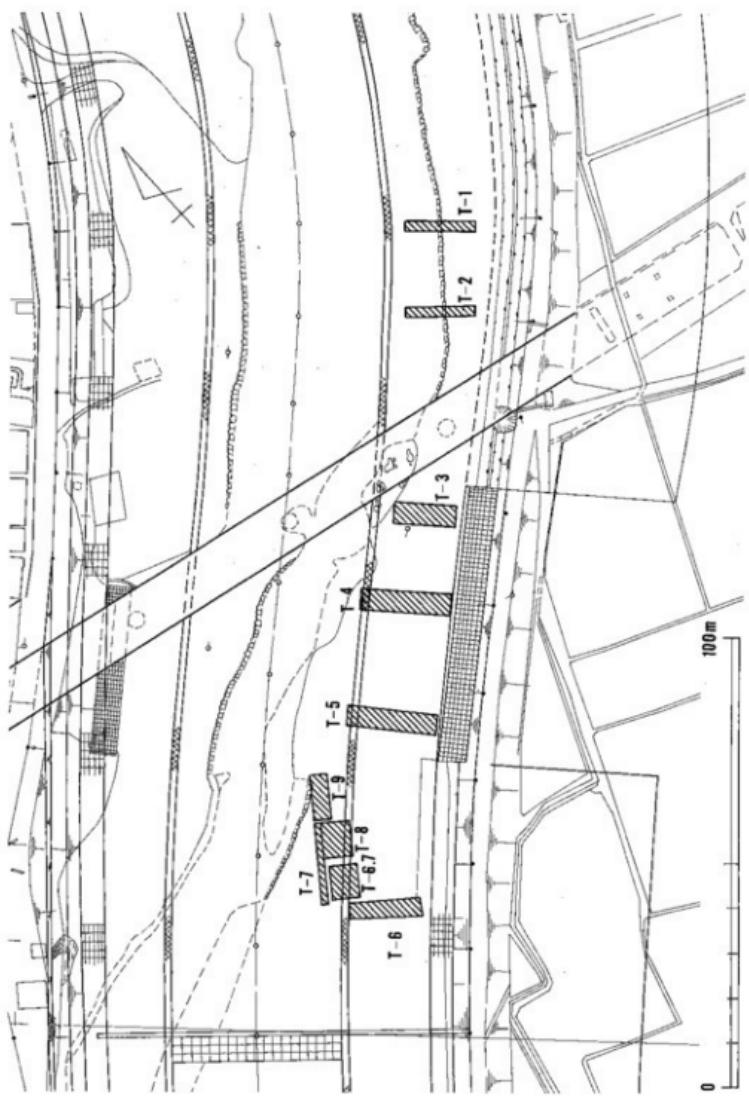
上述の結果を総括する。

各トレンチでは、旧河道が検出され、その堆積物中から遺物が多数出土した。またこれ以外の沖積低地部では、水田土壌ないしは土壌化した堆積物が見られ、遺物もごく少量出土しているが、平面的に水田面を検出しうるような遺構（畦畔・溝・杭など）ないしは水田上を被覆する砂層は検出されなかった。

調査区南部の沖積微高地上では、遺物を包含する層位は検出されたが、拡張区での調査でも遺構は検出されなかった。

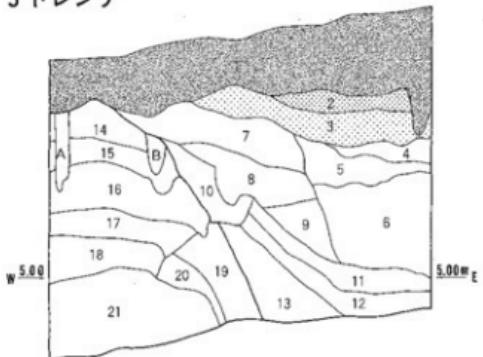
こうしたことから、確認調査対象範囲内には、遺構は分布しないものと判断され、全面調査を実施するには至らなかった。

しかし、沖積微高地の存在や、旧河道内から出土した多数の遺物は、至近距離に遺跡が存在することを示唆している。約2km上流の玉津田中遺跡の例をひくまでもなく、今後、周辺地域での開発行為に対しては、慎重な対応が求められるであろう。



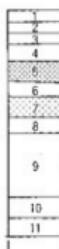
第8図 確認調査（トレンチ）配置図

3 トレンチ

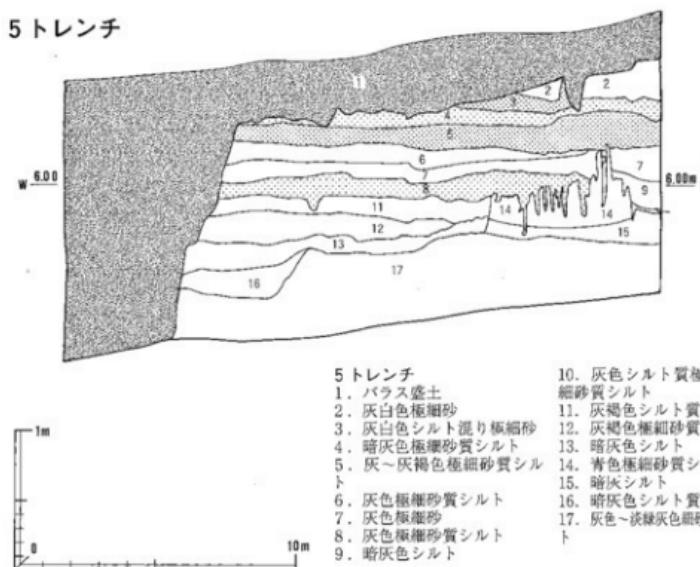


- |                           |                     |                   |
|---------------------------|---------------------|-------------------|
| 3 レンチ                     | 12. 黒灰色シルト          | 4 レンチ             |
| 1. バラス底土                  | 13. 暗青～灰色シルト        | 1. 細砂質シルト         |
| 2. 白灰色～淡灰褐色極細砂            | 14. 褐色シルト混り極細砂      | 2. 褐色シルト質粗砂       |
| 3. 淡灰褐色シルト混り極細砂           | 15. 暗黃褐色シルト混り極細砂    | 3. 灰色細砂質シルト       |
| 4. 淡灰褐色極細砂                | 16. 黄褐色シルト          | 4. 暗褐色板細砂混りシルト    |
| 5. 淡灰褐色～黃灰色細～極細砂          | 17. 黃灰褐色シルト         | 5. 暗褐色板細砂質シルト     |
| 6. 淡灰色～淡綠色極細砂～中砂          | 18. 暗灰色極細砂質シルト      | 6. 暗灰～暗褐色板細砂混りシルト |
| 7. 暗灰色風化レキ混り細砂質シルト        | 19. 青色シルト           | 7. 黄灰色細～中砂        |
| 8. 暗灰色～暗褐色細レキ混り<br>細砂質シルト | 20. 暗青灰色極細砂質シルト     | 8. 暗灰色シルト         |
| 9. 硫化青～暗褐色シルト             | 21. 青色沙             | 9. 地色粗砂混りシルト      |
| 10. 暗灰色シルト                | A. 暗灰褐色ブロック混り (Pit) | 10. 地色シルト         |
| 11. 暗灰色シルト                | B. 暗青褐色極細砂 (Pit)    | 11. 暗灰色シルト～粘土     |

4 トレンチ

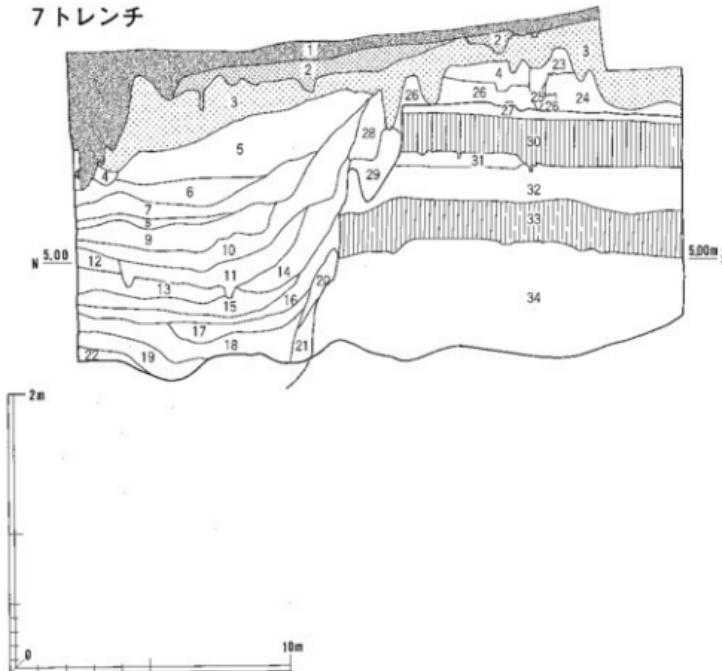


5 トレンチ



第9図 3、4、5トレンチ土層断面図

## 7 トレンチ



### 7 トレンチ

- |                                  |                                    |                     |
|----------------------------------|------------------------------------|---------------------|
| 1. バラス盛土                         | 11. 暗灰褐色シルト                        | 22. 淡緑灰色極細砂         |
| 2. 灰褐色シルト混り極細砂                   | 12. 暗灰褐色シルト質粗砂～極細砂                 | 23. 暗灰褐色シルト質極細砂     |
| 3. 灰黄色シルト混り極細砂                   | 13. 灰褐色シルト                         | 24. 灰色～暗灰色細～極細砂     |
| 4. 黄色極細～細砂                       | 14. 暗灰色極細砂質シルト                     | 25. 穗色細砂            |
| 5. 暗褐色細レキ混り極細砂                   | 15. 灰色～淡層灰色シルト                     | 26. 灰色～穂色極細砂～細砂     |
| 6. 暗褐色細レキ混り極細砂                   | 16. 暗灰褐色シルト質極細砂                    | 27. 灰白色シルト質極細砂      |
| 7. 暗褐色細レキ混りシルト質砂                 | 17. 暗灰褐色シルト質極細砂<br>(灰白色シルトのブロック混り) | 28. 暗褐色砂レキ          |
| 8. 淡灰色シルト混り極細砂<br>(灰白色極細砂ブロック混り) | 18. 淡綠灰色極細砂                        | 29. 暗灰褐色極細砂         |
| 9. 暗褐色～黒褐色細レキ混り                  | 19. 暗灰色シルト質極細砂                     | 30. 暗灰褐色シルト質極細砂～シルト |
| 10. 極細砂質シルト (炭層含む)               | 20. 黑色粗砂～黒灰色砂質シルト                  | 31. 灰白色極細砂          |
|                                  | 21. 淡綠灰色シルト<br>(暗灰色ブロック混り)         | 32. 灰白色シルト          |
|                                  |                                    | 33. 暗灰褐色シルト～粘土      |
|                                  |                                    | 34. 青緑色シルト          |

第10図 7 トレンチ土層断面図

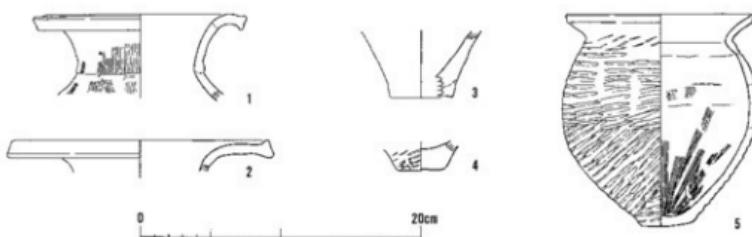
## IV. 出土遺物

### 1. 弥生土器

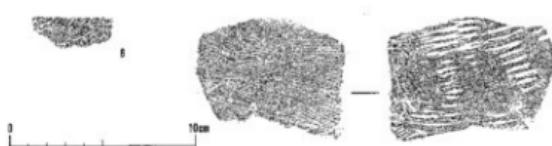
弥生時代末の遺物は次節で扱うこととする。それ以前の土器も少量ながら認められる。確実ではないが、プロボーション・胎土から前期と思われる破片も数点含まれている。確実な土器は第27図の5点だけである。

2点は壺で、ともに口縁部の破片である。表面磨滅している。プロボーションから後期の壺と考えられる。(1)は、端部の約8分の1の小片であり、残存高2.2cm、復原径17.9cmを測る。(2)は残存高6.2cm、復原径15.1cmを測り、頸部に浅い段を有する。縦方向のハケで整形しており、口縁部周辺のみヨコナデで仕上げている。特徴的な点は、ハケ原体が磨滅していることで、使い古したハケであることが伺われる。

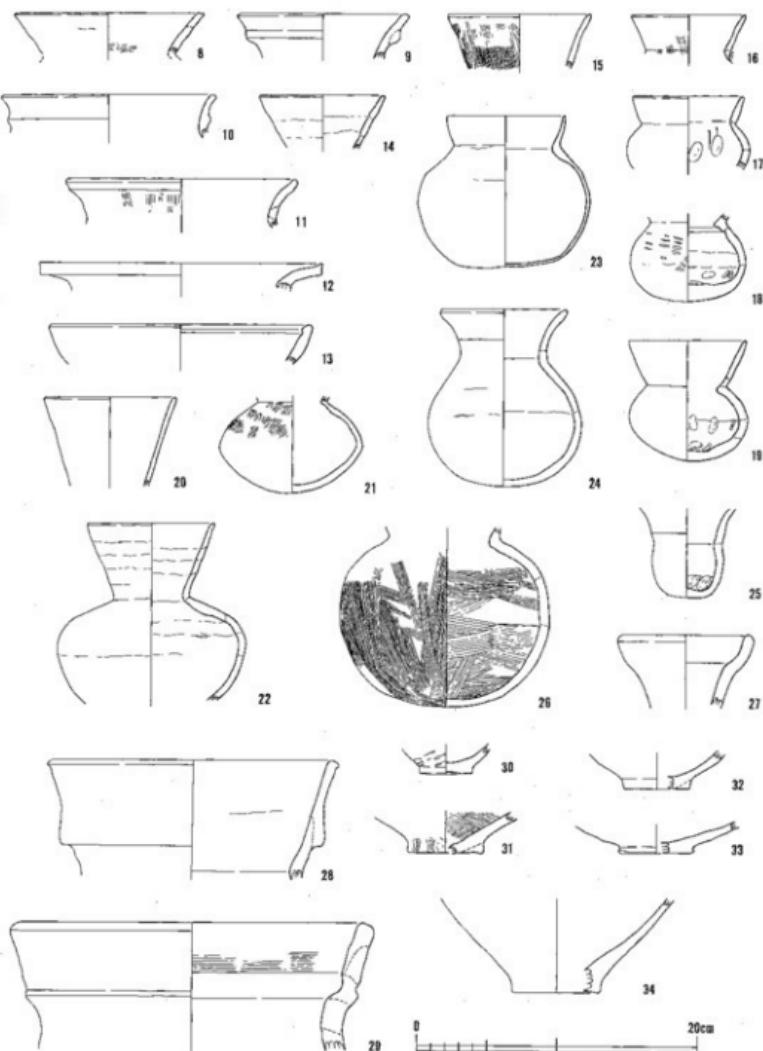
(3)～(5)は壺である。(3)(4)は底部で、(3)はプロボーションから古相を示している。外面タタキ成形であろうと思われるが、今回出土したなかでは最も古い時期に比定できよう。(4)も底部であるが、壺の器形をしているが、成形技法や作りの粗雑であ



第11図 弥生土器 実測図



第12図 弥生土器 拓本



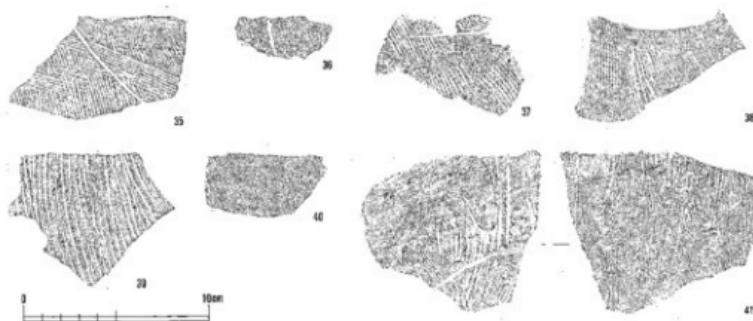
第13図 土器実測図(1)

る。底部だけは完全に残っている。(5)のみ図上で完形に復原出来る。口径13.3cm、器高15.3cmを測る。口径と最大腹径が同じもので、典型的な後期の分割成形技法を示している。底から7.0cmのところで縫いでいる。外面はタタキ成形で粗い原体で強く叩いている。そのため、外形にも凹凸が表れている。下半は右上がりの上半は平行のタタキメが施されている。口縁部はタタキ成形後に折り曲げて作っており、その際のタタキメの歪みが見られる。底部も同様である。上半はタタキ成形のちナデで調整を加えている。内面はハケ整形している。縫方向のち上半は横方向の8本単位の細かいハケを加え、頸部下は板ナデで仕上げている。底部は突出しておらず、やや新しい要素を示している。

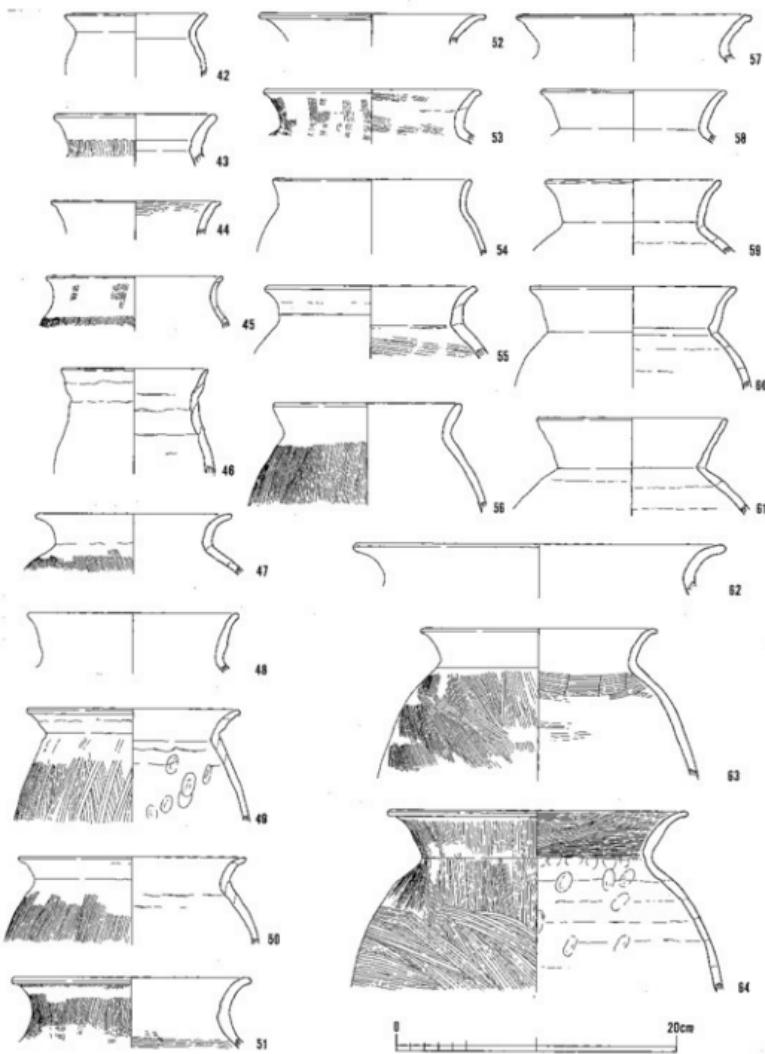
他に壺の口縁部の小片が1点(6)ある。(2)と同じ端部に刻み目を施すものである。タタキメの施された破片もあるが、時期は決定しがたい。

## 2. 弥生時代末から古墳時代の土器

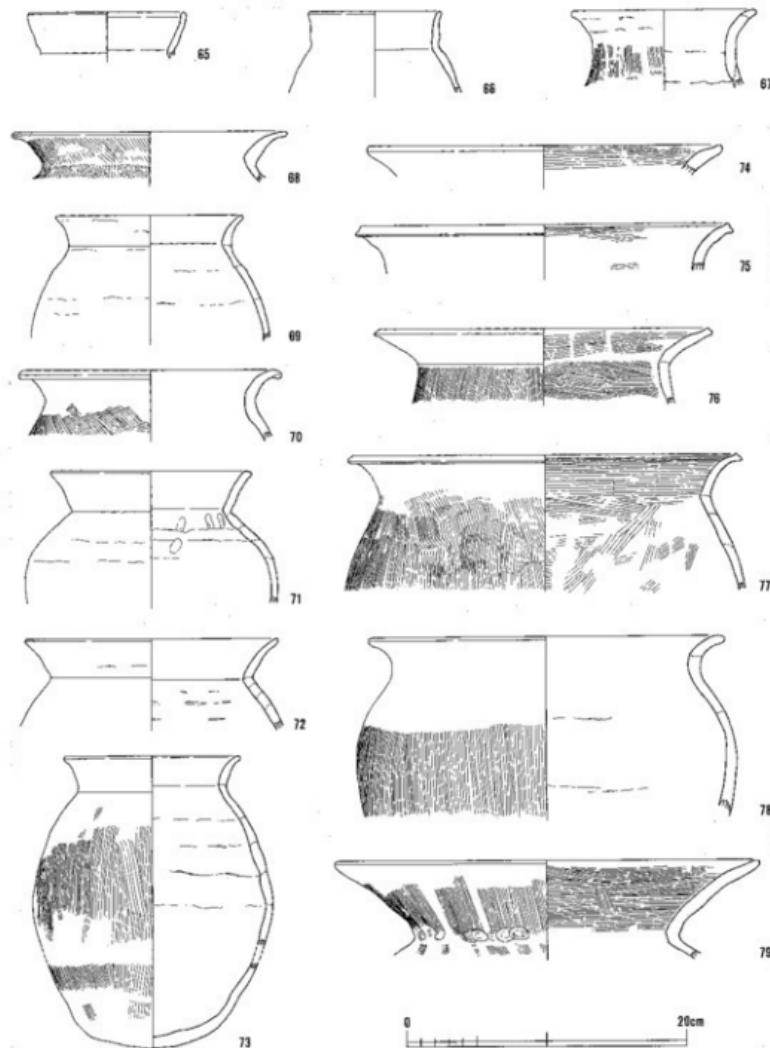
一部弥生時代の範疇に含まれるものもあるかもしれないが、確実に判別できないことから、包括して扱うこととする。西河原遺跡出土遺物の大半はこの時期の遺物である。搬入土器も少なからず含まれている。その比率は山陰系が大半で、吉備の土器が少量ある。



第14図 土師器 拓本



第15図 土器実測図(2)



第16図 土師器 実測図(3)

## ①壺 [8 ~ 12・14 ~ 34]

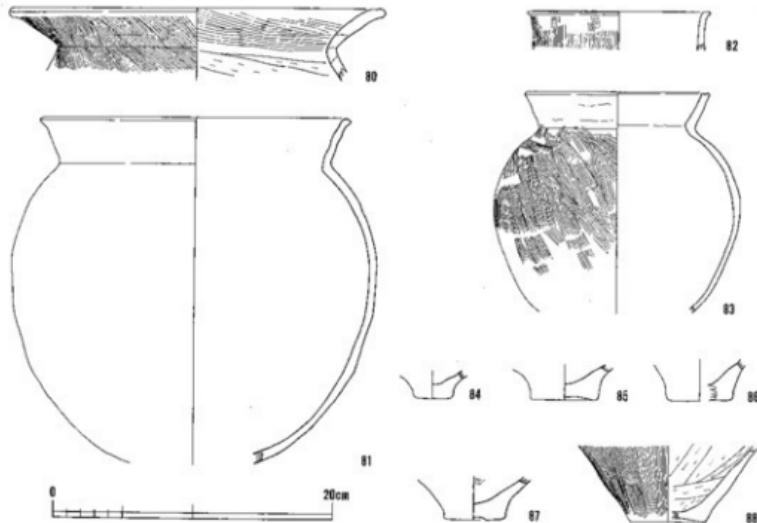
図化したものは26点ある。小型丸底壺が多いが、大型の山陰系の壺も含まれている。山陰系の壺は(9)(10)の突帶を有するものもある。

長頸壺も2点ある。(21)も体部だけであるが、長頸壺かもしれない。(22)は粘土縫の織目が外面にも明瞭に見られ、丁寧な作りではない。

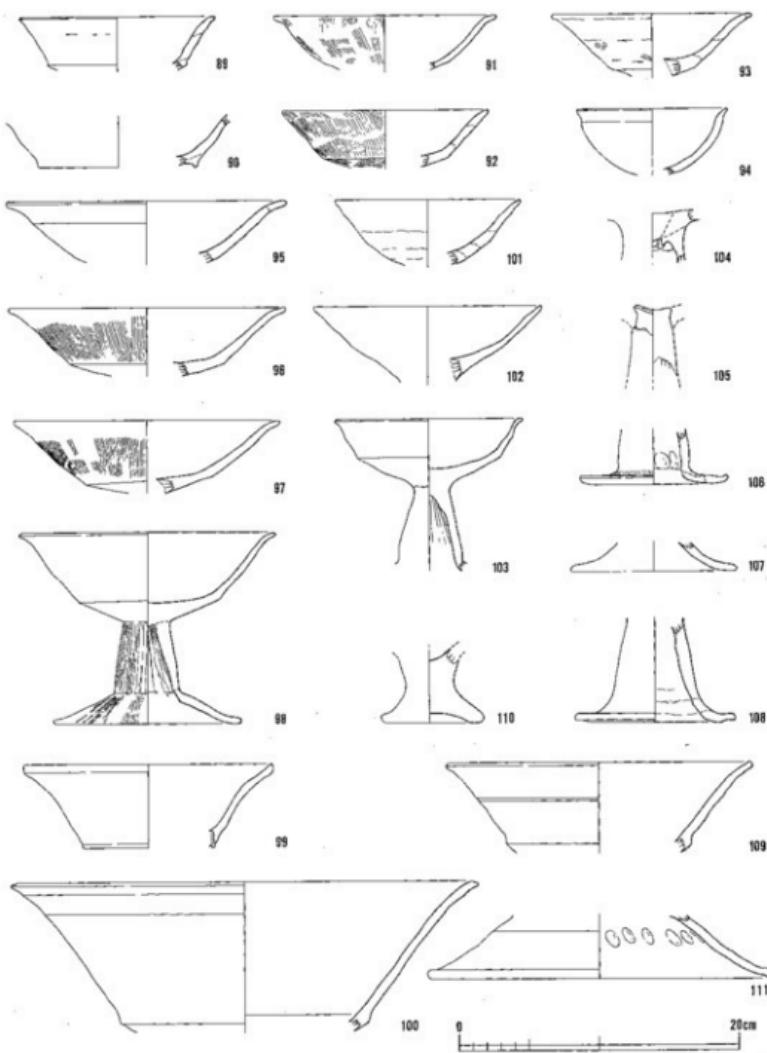
小型丸底壺は通有のタイプもあるが、(24)のように下膨れの頸の長いやや変わったタイプのものもある。また、(25)(27)のように特殊な器形のものもある。

## ②壺 [13・42~88]

48点図化している。(13)は典型的な布留式の口縁部である。端部を折り曲げている。(65)も特徴的な折り返しはないが、同タイプの壺である。壺の中には粗雑なものから丁寧な作りのものまであり、時期的にも庄内平行～布留式のもの、さらに須恵器を伴う時期まで存在するものと思われる。図化したものには、タタキメが見られないが、破片にはタタキメが見られる。



第17図 土師器 実測図(4)



第18図 土師器 実測図(5)

### ③高杯 [89~109]

高杯にもタイプが幾つかある。大きくは通有のものと椀形のものである。椀形のものの中にも浅いものとやや深いものがある。稜線に突帯を有した装飾ぎみの高杯(90)もある。柱状部も中空のものと中実のものがある。また、精製されたものと粗雑なものの変化も見られる。

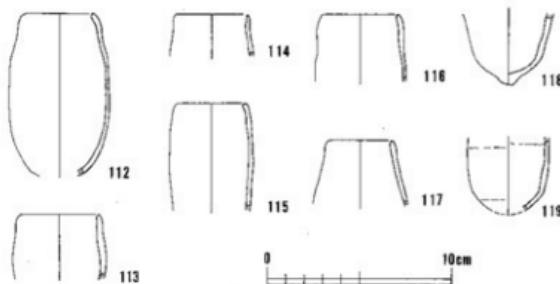
(100)は大型の杯部と考えているが、器台かもしれない。同様に(109)も上台部の可能性がある。

### ④脚台 [110]

鉢の脚台と思われるものである。磨滅が著しく、端部はやや延びるか細くなっているかもしれない。

### ⑤器台 [111]

(111)は下台部で、磨滅が著しい。



第19図 製塙土器 実測図



第20図 製塙土器 拓本

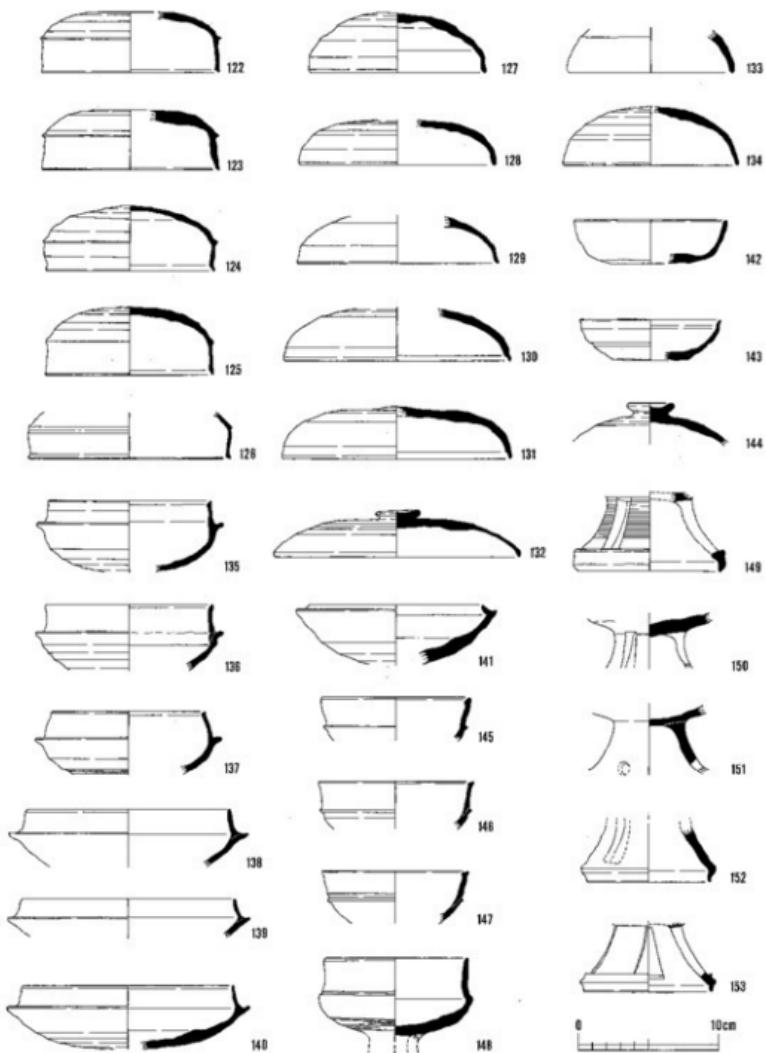
#### ⑥製塙土器

各トレンチから出土しているが、6・7トレンチ間拡張区が最も多い。製塙土器の性格上、薄手で残存状態は悪い。タイプは2種類あり、手捏ねのものと外面タタキ成形のものに分けられる。後者は破片しか出土しておらず、形態は不明である。色調は黒っぽく、内面は黒色である。手捏ねのタイプも図化できるものは少なく、図上で完形になるものを含めて5点だけである。底部は尖りぎみの丸底である。底は成形段階のヘソ状の突出部が残っているものもあり、特徴的である。口縁部はやや内傾気味のものが多い。胎土は精良なものと、やや悪いクサリレキを比較的多く含むものがある。ほぼ完形のもので器高 cm、口径 cmを測る。

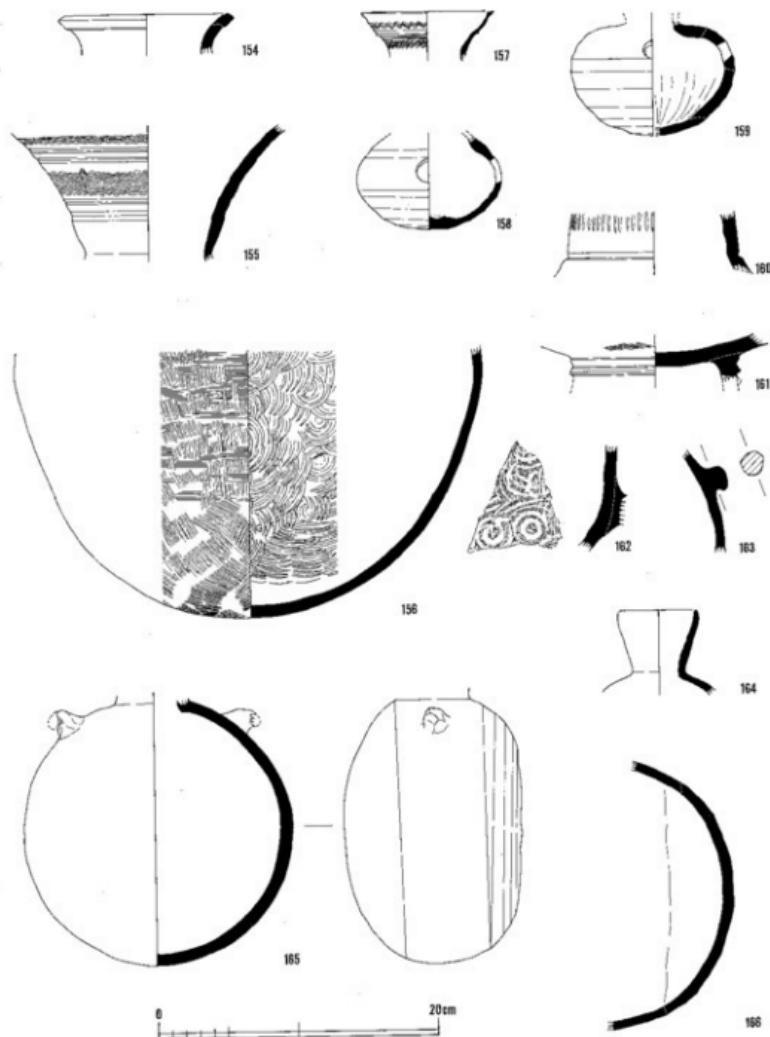
### 3. 古墳時代後期の須恵器

全体の中での出土量は土師器の方が多いが、図化した率は逆に須恵器の方が高くなっているものと思われる。

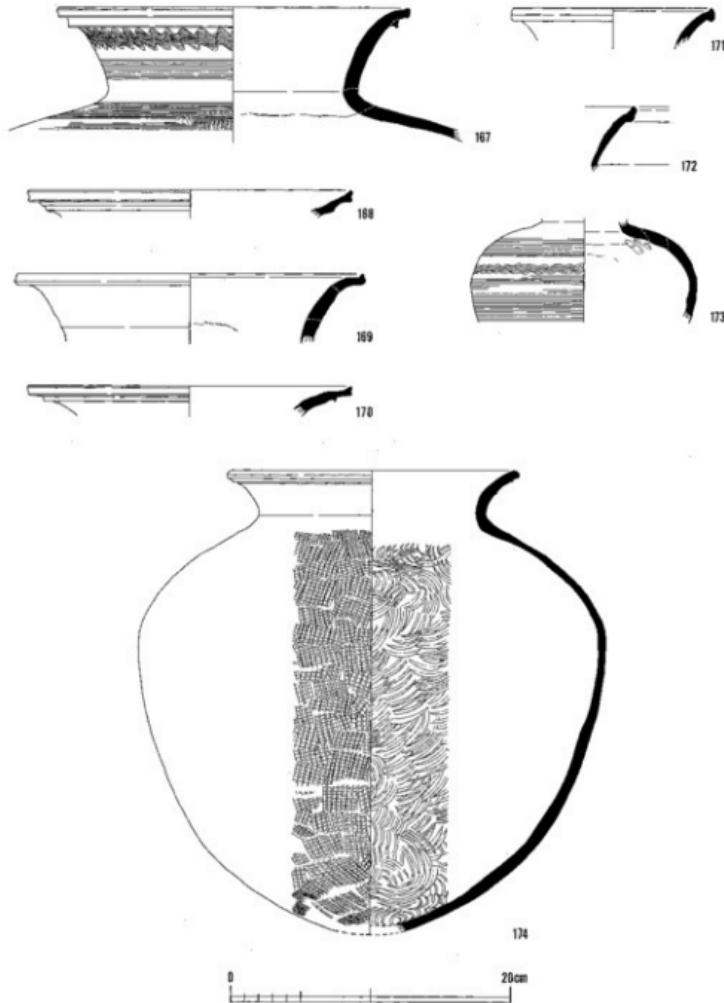
出土地区は6・7トレンチを中心に出土している。図化した点数は53点あり、他に拓本だけ載せたものが4点ある。内訳は、杯蓋13点、杯身9点、高杯10点、壺6点、甌3点、器台2点、瓶1点、提瓶3点、横瓶1点、甕5点である。時期的には古い段階の須恵器が主体であるが、7世紀に下るものまで見られる。古い段階（MT21、TK27）の土器は陶邑からの搬入品と思われる。



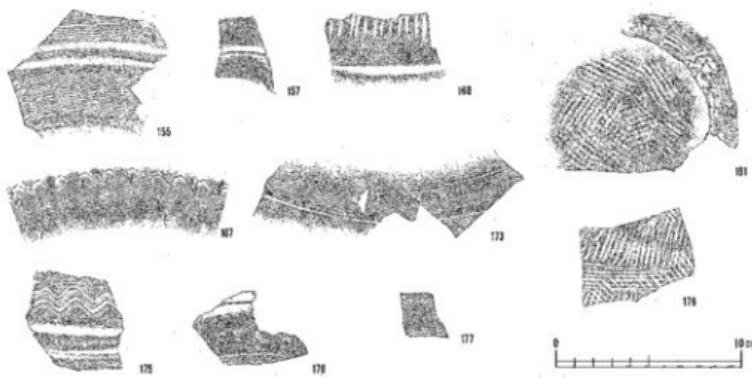
第21図 須恵器 実測図(1)



第22図 須恵器 実測図(2)



第23図 須恵器 実測図(3)



第24図 須恵器 拓本(1)



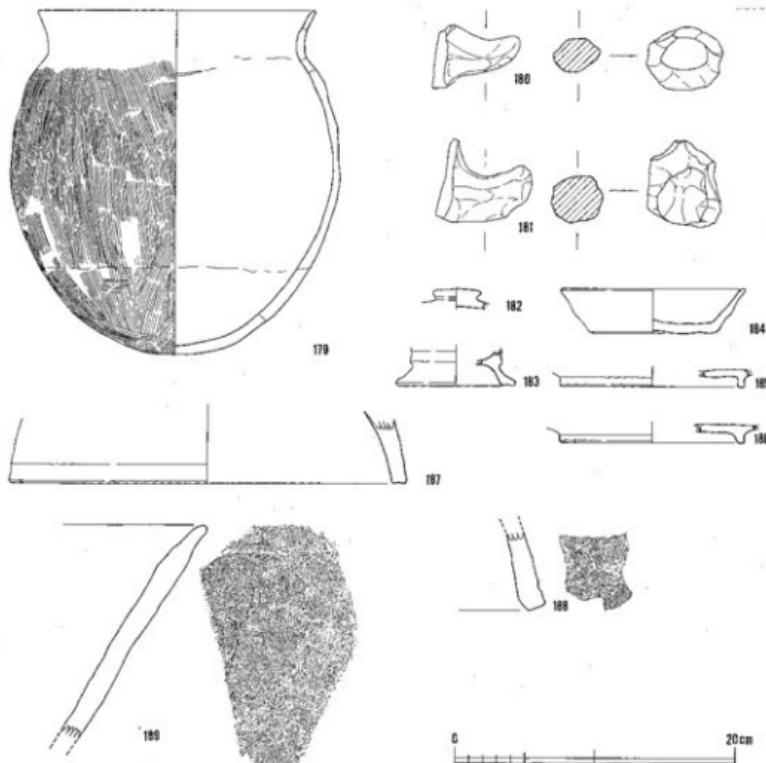
第25図 須恵器 拓本(2)

#### 4. 歴史時代の土器

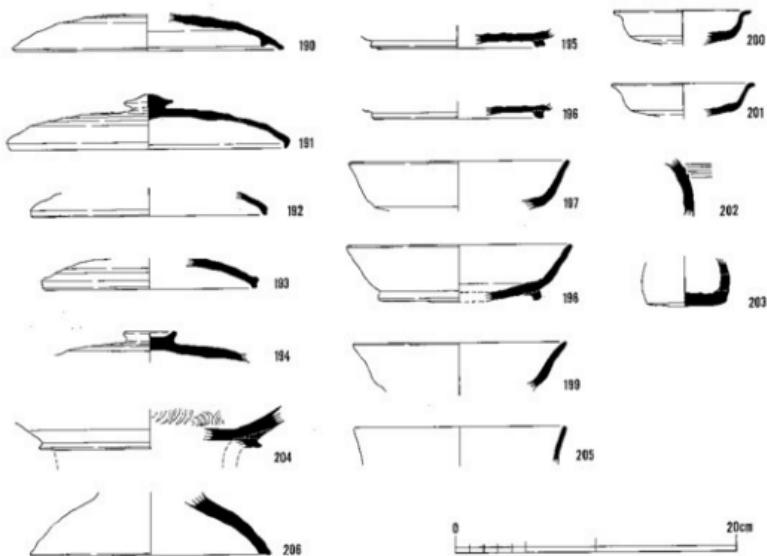
量的には古墳時代はもちろん、弥生時代の遺物よりも少ないとと思われる。

##### ①土師器

11点図化している。(179)はプロポーションは古墳時代と似るが、胎土と頸部のつくりから歴史時代とした。やや長胴化傾向にある。(180)(181)はともに手捏ねの把手である。(182)は杯蓋でつまみ部分だけが残っている。(184)～(186)は杯身で(184)はヘラ切りがなされている図上での完形品である。(185)(186)はともに輪高台を持つもので、精良な胎土を持つ精製品である。高台部は退化しあげてい



第26図 歴史時代遺物 実測図(1)



第27図 歴史時代遺物 実測図(2)

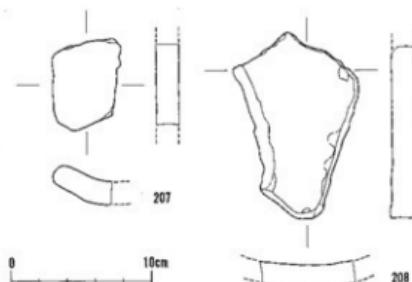
る。(187)(189)は甕と思われる破片である。(187)は煤が付着している。(189)は色調もやや黄色っぽく埴輪の可能性も残されている。

### ②須恵器

杯蓋5点、杯身6点、皿2点、壺3点、高杯1点の計17点を図化している。奈良時代の範疇に入るものが大半であるが、平安時代に入る杯も含まれる。

### ③その他の遺物

平瓦の破片と瓦質鍋と思われる破片が出土しているが、すべて磨滅が著しい。



第28図 瓦 実測図

## V. おわりに

西河原遺跡の調査は、埋め戻し作業も含めて実働7日間という短期間の調査であった。遺跡の発見は大雨ごとに明石川の水量が増え、川底や川岸を削ることによって、多量の土器が現れることによるものである。一部のいわゆる考古学少年の集まるところであった。

当地の河川改修工事に先立ち、遺跡の範囲確認調査を実施した。トレーナーを主体とする確認調査で、遺構は確認されなかった。ただ、包含層が広がっており、遺構の存在する可能性が考えられたことから、一部拡張して調査を行った。遺構面と考えられる安定した面は確認されたが、調査区内では遺構は確認されなかった。遺構は東側の現在の堤防下に小規模の微高地があり、そこに遺跡が広がっているものと思われる。時期的には5世紀前半の遺構である。東方に広がる新方遺跡や明石川対岸の南西方向に立地する吉田南遺跡などと同時期の大集落が構築されている地域の中になる。出土遺物量や地形から見て、大規模な集落が西河原遺跡に営まれたとは思えない。分村などの小規模集落が存在していたと思われる。

出土遺物量は、さほど多いとは言えない。弥生時代から歴史時代の遺物を包含していた。周辺の遺跡で出土する土器と同じ通有の土器である。時期的には古墳時代初頭から前期の遺物なかでも布留期の土器が最も多数を占めている。特殊な土器はなく、一般的な土器が出土している。山陰系の土器が含まれていることなど、周辺の遺跡と同じ在り方で、その1資料を加えたことになる。

今後も明石川河川改修は上流部に向かって計画されている。僅かの調査でも新たな知見が加わる可能性がある。今後とも地道な調査が必要であろうと思われる。

第1表 弥生土器観察表

No.	器種	法量		色調	形態の特徴	技法	備考
		口径	器高				
1	壺	15.1	(6.2)	器表) ぶい模 器内) 暗灰	頸部はやかに屈曲し、口縁部はラバ状に開く。端部は内外に肥厚する。	外面ハケ整形。 口縁部ヨコナデ。 内面はユビ調整。	表面磨滅
2	壺	17.6	(2.4)	外) 淡褐色 内) 褐色	直立ぎみの頸部から大きく開く口縁部に繋がる。水平に開いたのち、腹部は内外に肥厚する。	ハケ整形ののち、ヨコナデと思われる。	表面磨滅
3	壺	(4.6)	(4.8)	外) 茶褐色 内) 淡黄	底面平坦で、直線的に体部延びる。	外面タタキメののちナデ仕上げ。内面はユビ整形。	長石の砂粒含む
4	壺	3.1	(2.1)	外) 黒褐色 内) ぶい模	底面中央は僅かに上げ底になる。模様明瞭でない。	外面タタキメののちナデ仕上げ。 内面はユビ整形。底面もユビ仕上げ。	長石・チャートの砂粒含む。
5	壺	13.3	15.3	外) 灰黄色 ～浅黄 内) 褐色	底部は平坦でなくほい模様で、肩部は圓錐形で、その字の口縁部になる。腹部は上方へつまみ上げ尖りぎみ。	外面下半は右上がりのタタキで、上半は平行タタキ。 口縁部もタタキ成形ののち折り曲げて仕上げる。内面はハケ整形。口縁部はヨコナデ。	分割成形。 2次焼成。 石美・長石含む。
6	壺		(1.4)	灰黄～暗灰			
7	壺		(5.2)	外) 茶褐色 内) 灰黄		外面タタキののちナデ仕上げ。内面ハケ整形。	

第2表 土師器観察表

(法量 cm)

No.	器種	法 量 口径 高さ	色調	形態の考證	技 法	備 考
8	壺	(12.6) (2.85)	内) 淡黄色 外) 淡黄褐色	「く」の字形に屈曲する口縁部と思われる。端部は平面をつくる。	内面ハケメの後ヨコナデ、外面のヨコナデ	
9	壺	(11.6) (3.1)	内) にぶい橙～褐灰色 外) 淡橙色	口縁部斜め上方にのび、外側に粘土部を付す複合口縁。端部は丸味をもつ平面をつくる。	ヨコナデ。	白雲母片含む。焼成良。
10	壺	(14.4) (3.1)	灰白色	直立気味に斜め上方にのびる口縁部。端部は平面をつくる。 9と同じく複合口縁。	ヨコナデ。	やや粗い粘土でチャート含む。
11	壺	(16.0) (3.4)	灰白色	口縁部はゆるやかに外反し、端部を上方に屈曲させて丸くおさめる。	内面ヨコ方向のハケメの後ヨコナデ、外面タテ方向のハケメの後ヨコナデ。	
12	壺	(19.9) (1.95)	内) 灰白色 外) 淡黄褐色	斜め上方に開く口縁部で、端部上方に引き出し、面をつくる。	磨滅の為調整小明。	
13	壺	(16.3) (2.8)	内) 灰黄色 外) 灰黄褐色～黒褐色	口縁端部が内部に肥厚。	ヨコナデ。	布留式。
14	小型丸底壺	(8.9) (3.8)	灰白色	口縁部まっすぐ斜め上方にのび、端部わずかに外向きに肥厚する。	ヨコナデ	
15	小型丸底壺	(10.0) (3.9)	灰黄色	口縁部なだらかに斜め上方にのび、端部を丸くおさめる。	内面ヨコナデ。外面タテ方向の2種類のハケメ(8~9本/cm、20本/cm)の後ヨコナデ。	
16	小型丸底壺	(8.0) (3.4)	灰白色	「く」の字形に屈曲する口縁部で、端部は丸くおさめる。	ヨコナデ。外面タテ方向のハケメの後ヨコナデ。	
17	小型丸底壺 腹径 (8.8)	(7.8) (5.15)	にぶい橙～灰白色	口縁部「く」の字形に屈曲、端部丸くおさめる。体部は球形をなす。	口縁部ヨコナデ。体部ユビ成形、ユビナデ。	2次焼成を受けているか?
18	小型丸底壺	腹径 (8.3)	(6.25)	灰黄～暗灰黄～黒色	体部球形で底部はやや平たい丸底。	内面ユビ成形。外面斜め方向のタタキの後ハケメを施し、その上からユビ調整。
19	小頸丸底壺	(8.4) 腹径 (8.5)	8.7	浅黄～黒色	口縁部「く」の字形に屈曲、端部は丸くおさめる。体部は球形。	口縁部ヨコナデ。体部内面ユビ成形。外面腹部上半はユビ成形の後ナデ調整。
20	(口縁)	(9.2)	(6.3)	浅橙～橙色	口縁部まっすぐ斜め上方にのび、端部外向きに丸くおさめる。	表面磨滅。内面ヨコ方向のハケメと思われる痕跡あり。
21	小型丸底壺	腹径 10.25	(6.85)	にぶい黄橙色	体部中央の張る球形。	内面ユビ成形。外面上半タテ方向のハケメの後ナデ調整。下半不定方向のヘラケズリの後板ナデ。
22	壺	(9.0) 腹径 (13.5)	(12.6)	内) 灰～ にぶい橙色 外) 灰褐色～ 淡黄色	口縁部斜め上方へまっすぐのび端部や外向きに丸くおさめる。体部や肩の張った球形。	口縁部ヨコナデ。体部内面ユビナデ、下半板ナデ。外面不定方向のナデ。

No.	器種	法量		色調	形態の特徴	技法	備考
		口径	器高				
23	壺	8.4 腹径 (12.3)	10.9	赤橙～橙色	口縁部や内側しながら斜め上方にび、端部やや尖り気味に丸くおさめる。体部はや肩の張る球形で、底部は平ら。	表面磨滅。	磨滅の為か器壁薄い。
24	壺	(8.9) 腹径 (11.0)	8.7	灰白色	口縁部「く」の字形に屈曲、端部は丸くおさめる。体部は下半の張る球形。底部はやや平たい丸底。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ溝整。	腹部上半、円形に2次焼成をうける。
25	鋸壺	(7.5) 腹径 (5.15)	(7.0)	赤橙～灰白色	口縁部ゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。体部は長卵形で底部は平ら。	口縁部ヨコナデ。体部手捏ね。	
26	壺	腹径 (14.95)	(12.75)	赤黒～橙 ～浅黄色	体部やや角ばった球形。	内面上半細いハケメ、下半蜘蛛の巣状、ハケメ(6～7本/cm)。外面タテ斜め方向に(10本/cm)のハケメを施す。	2次焼成を受ける。スス付着。
27	不明品 (口縁)	(9.1)	(5.15)	褐色	口縁部斜め上方へのびた後、内側する。端部は丸くおさめる。	正面磨滅。内部の一部ヨコナデと思われる。	
28	壺	(19.9)	(8.55)	内) 黒～灰～ 灰白色 外) 灰～灰白色	口縁部斜め外方へのび、端部外方へつまみ出し平面をつくる。外側に粘土層を付す複合口縁。	内面ヘラナデ(ミガキ)、外面ヨコナデ。粘土層接合時にユビオサエ、ユビナデ。	山陰系
29	壺	(24.6)	(9.2)	内) 黒色 外) 黒褐 ～灰黄色	口縁部外反し、「二重口縁の豪」口縁部を突出させ、斜め上方にのびる。端部は角ばり平面をつくる。	ヨコナデ。内面の一部、横方向のハケメ(6本/cm)がみられる。	器壁かなり厚い。内面有機質付着。
30	(底部)	底径 (3.6)	(2.15)	暗灰色	突出した平底。	内面ユビ底形。外面タタキ。底部再成形。木の葉痕。	
31	(底部)	底径 (5.5)	(2.95)	灰色 ～暗灰色	突出した平底。	内面蜘蛛の巣状にハケ形。外面ユビナデ。底部再成形。	クサリレキ含む。外面黒斑。
32	(底部)	底径 (4.6)	(2.8)	内) 暗灰黄色 外) 灰黄色	突出した平底。	ナデ調整。底部はヘラケズリの後ナデ。底部再成形。	長石・雲母の砂粒含む。
33	(底部)	底径 (4.6)	(2.2)	内) 淡黄色 外) 黄灰色	突出した平底。体部開き気味にのびる。	内面ナデ調整。外蓋ユビナデ、底部はヘラ調整。	石英・長石の小石粒含む。
34	(底部)	底径 (6.3)	(6.8)	内) 灰～灰白色 外) 浅黄褐色	平底。体部内側ながら斜め上方にのびる。	磨滅で詳細は不明だが、内面ナデ、外面ヘラミガキと思われる。	クサリレキ含む。
42	甕	(9.6)	(4.55)	内) ぶい褐色 外) 灰黄色	口縁部「く」の字形に屈曲。端部外向きに丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヨコ方向のナデ、外蓋ナデ調整。	
43	甕	(11.2)	(3.75)	淡黄色	口縁部外反気味にのび、端部やや角張る。	口縁部ヨコナデ。内面ナデ調整。外面タテ方向のハケメ(5本/cm)。	
44	甕	(11.8)	(2.45)	内) 淡黄色 外) 淡黄 ～暗灰色	口縁部外側につまみ出し、端面に凹みをつくる。	内面ヨコ方向のハケメ(6本/cm)の後ヨコナデ。外蓋ナデ調整。	外面スス付着。酸化粧含む。

No.	器種	法 口径 寸径		色 蘭	形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		登	器高				
45	甕	(12.2)	(3.7)	内) 黒色 外) 黄橙 ～褐灰色	口縁部なだらかに外反しながらのび、端部は丸くおさめる。	内面ヨコナデ、ヨコナデ。 外面タテ方向のハケメの後ヨコナデ。体部はタテ方向のハケメ(7本/cm)調整。	
46	甕	(10.2)	(7.6)	浅黄橙色	口縁部なだらかに「く」の字形に屈曲。端部は丸くおさめる。	磨滅の為詳細は不明だが、ユビ成形と思われる。	内外面結土の塵ぎ日顯著。
47	甕	(14.05)	(4.4)	浅黄色	口縁部外反しながらのび、端部丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ調整。外面斜め方向のハケメ(7~8本/cm)の後一部ナデ。	
48	甕	(14.6)	(4.15)	灰白色 ～灰色	口縁部外反気味にのび、端部丸くおさめる。	ヨコナデ。	口縁端部は2次焼成を受ける。クサリレキ含む。
49	甕	(14.8)	(7.9)	内) 灰白色 外) 灰白 ～褐灰色	口縁部「く」の字形に屈曲し、端部や下方につまみ出し面をつくる。体部長脚か?	口縁部ヨコナデ。体部内部板ナデ、一部ユビオサエ。外面横筋子状の3本単位のハケメ調整。	黒斑あり。
50	甕	(15.9)	(6.1)	内) にぶい橙色 外) にぶい橙 ～褐灰色	口縁部短く外反し、端部や角張り気味に丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ。体部内面板ナデ。外面(5~6本/cm)の横方向のハケメ調整。	クサリレキ含む。
51	甕	(16.0)	(5.05)	灰白色	口縁部外反しながらのび、端部はやや外側に肥厚する。	内面ヨコナデ、横方向のハケメ。外面縱斜め方向のハケメ(6~7本/cm)後ヨコナデ。	
52	甕	(15.6)	(2.2)	灰白 ～褐灰色	口縁部開き気味に外反し、端部を外側につまみ出す。	磨滅の為詳細不明だが、内面ハケメの後ヨコナデ、外面ヨコナデか?	2次焼成か?
53	甕	(15.6)	(3.8)	灰黄色	口縁部外反しながらのび、端部はやや外下方に肥厚させる。	内面横斜め方向のハケメの後ヨコナデ。外面縱斜め方向のハケメ(5~6本/cm)のヨコナデ。	
54	甕	(13.8)	(5.4)	灰黃～灰色	口縁部ゆるやかに外反し端部は角張り気味に丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ。体部成形後わずかにナデしている。	
55	甕	(14.5)	(5.1)	灰白色	口縁部外反しながらのび、端部は角張り平面をつくる。	口縁部ヨコナデ。体部内面(5本/cm)のハケメ調整。外面斜めの方向の板ナデ。	器壁薄い。
56	甕	(13.2)	(7.8)	灰黃～黒色	口縁部「く」の字形に屈曲し端部丸くおさめる。体部なだらかに斜め下方へ下る。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向の板ナデ。外面は縦方向のハケメ(8本/cm)。	口部スス付着。クサリレキ含む。
57	甕	(16.0)	(3.4)	灰白色	口縁部「く」の字形に屈曲し、端部外側につまみ出し、口唇部に端面を有する。	ヨコナデ。	クサリレキ含む。
58	甕	(12.7)	(3.8)	にぶい黄橙 ～灰白色	口縁部外反しながらのび、端部は角張り気味におさめる。	ヨコナデか?	磨滅気味。クサリレキ含む。

No.	器種	法量 口徑 器高	色調	形態の特徴	技法	備考
59	甕	(12.1) (5.2)	灰黄色	口縁部外反しながらのび、端部はやや角張り気味におさめる。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ調整。	外面スス付着。
60	甕	(14.8) (7.75)	内) 灰黄色 外) 黄灰~黒色	口縁部外反しながらのび、端部は丸くおさめる。体部内凹しながら斜め下方へ下る。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ調整。	口縁部スス付着。
61	甕	(13.3) (6.85)	内) 灰黄色 外) 灰黄~黒色	口縁部まっすぐ斜め上方へのび、端部を丸くおさめる。体部などらかに斜め下方へ下る。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ調整。	口縁部スス付着。
62	甕	(25.6) (3.6)	浅黄橙色 断) 灰色	口縁部外反し、端部丸くおさめる。	ヨコナデ。	弥生土器か? 胎土類い。
63	甕	(16.2) (10.7)	内) 灰白色 外) 灰黄~淡黄色	口縁部外反し、端部は外側につまみ出し尖り気味におさめる。体部などらかに斜め下方へ下る。	口縁部ヨコナデ。体部内面粗いハケメの後ナデ調整。 外面斜め方向のハケメ(6~7本/cm)の後板ナデ。	
64	甕	(20.8) (12.8)	内) 明黄褐色 外) 浅黄~黒色	口縁部「く」の字形に屈曲させ端部外側につまみ出し丸くおさめる。体部内凹しながら斜め下方へ下る。	内面口縁部横方向のハケメ(8~9本/cm)、体部はユビ成形の後ナデ。外面口縁部斜め方向のハケメ(6本/cm)。体部(7本/cm)の粗いハケから(10本/cm)の細いハケ、さらに粗いハケを施す。	体部スス付着。
65	(口縁)	(10.9) (3.3)	内) 浅黄橙色 外) ぶい檻~灰褐色	口縁部やや内凹しながら斜め上方へのび、端部を内側に肥厚させる。	ヨコナデ。	
66	(口縁)	(9.2) (5.8)	褐灰色 断) 灰白色	口縁部直立気味にのび、端部をわずかに外側につまみ出す。	口縁部ヨコナデ。体部内面板ナデ、外面ユビ成形の後ナデ調整。	
67	(口縁)	(12.7) (5.6)	浅黄橙色	口縁部ゆるやかに外反し、端部を丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ。内面ナデ調整。外向、斜め方向のハケメ(7~8本/cm)の後ナデ調整。	
68	甕	(19.7) (3.6)	内) 灰黄色 外) 浅黄~黒色	口縁部「く」の字形に屈曲し、端部丸くおさめる。	内面ヨコナデ、頭部はヘラナデ調整。外面斜め方向のハケメ(5~6本/cm)の後ヨコナデ。	外面スス付着。
69	甕	(13.3) (8.9)	内) ぶい檻 外) 灰白~黒色	口縁部「く」の字形に屈曲し、端部丸くおさめる。体部やや内凹気味に斜め下方へ下る。口縁部折り曲げて作られていく。	口縁部ヨコナデ、体部成形後ナデ調整。	焼成良好。 スス付着。
70	甕	(17.3) (5.3)	灰白色	口縁部外反し、端部さらに外下方に肥厚させる。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面は斜め方向のハケメ(6本/cm)調整。	
71	甕	(13.8) 腹径 (18.0) (9.45)	浅黄~橙 ~黒色	口縁部「く」の字形に屈曲し、端部角張り気味におさめる。体部内凹する。	口縁部ヨコナデ。体部内面ユビオサエ、外面ナデ調整。	スス付着。

No.	器種	法 口径 × 高さ × 厚さ		色調	形態の特徴	技法	備考
		口径	高さ				
72	甕	(17.9)	(6.55)	にぶい黄橙 ～黒色	口縁部「く」の字形に屈曲する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面タキの後ナデ整形をしていると思われる。	内面断面に有機質付着。
73	甕	(12.0)	(13.7)	浅黄～黄灰 ～黒色	口縁部「く」の字形に屈曲し、端部角張り気味におさめる。体部長胴形。底部平らな平底。	口縁部ヨコナデ。体部内面ナデ調整。外面肩方向のハケメ(6本/cm)で整形。底部ナデ仕上げ。	内面皮化物付着。外西スス付着。
74	甕	(24.8)	(2.15)	にぶい黄橙色	口縁部開き気味にのび、端部角張り気味におさめる。	内面横方向のハケメ、外面ヨコナデ。	背柱土器か？チャート・石英・長石粒含む。
75	甕	(26.0)	(3.3)	内) 灰白色 外) 棕色	口縁部外反し、端部上下方につまみ出し端面に凹みをつくる。	内面横方向のハケメ(5～6本/cm)の後ナデ？外面ヨコナデ。	
76	甕？	(23.3)	(5.3)	内) 黒灰色 外) 灰黄褐色	口縁部開き気味に斜め上方にのび、端部外側につまみ出し、端面に深い凹みをつくる。	内面横方向のハケメ(10本/cm)の後ナデ。外西口縁部ヨコナデ、体部縱方向のハケメ(8本/cm)整形。	
77	甕	(27.2)	(9.75)	内) 灰白色 外) にぶい黄橙 ～灰白色	口縁部「く」の字形に屈曲し、端部は上下につまみ出し、面をつくる。	内面口縁部は横方向のハケメ(5～6本/cm)、体部不定方向しのハケメの後ナデ調整。外西口縁部ヨコナデ、体部縱方向のハケメ(5～6本/cm)。	
78	甕	(24.4)	(12.7)	橙色	口縁部外反し、端部丸くおさめる。体部は内脣しながら斜め下方に下る。	口縁部ヨコナデ。体部内面磨滅。体部内面磨滅、外面縦方向のハケメ(6～7本/cm)とナデ調整。	小石粒、長石含む。
79	甕	(30.0)	(7.0)	灰白色 断) 端灰色	口縁部「く」の字形に親く屈曲、端部丸くおさめる。	内面横方向のハケメ(8本/cm)、外面縦方向のハケメ(8本/cm)、ユビオサエ。	
80	甕	(26.4)	(5.15)	にぶい黄橙	口縁部「く」の字形に屈曲、端部内面に凹面にもつ。	内面斜め方向のハケメ(3～4本/cm)、体部は斜め方向のハケメ(6本/cm)。口縁部はその後ヨコナデを施す。	砂礫含む。チャート多含む。
81	甕	(21.4) 腹径 (25.9)	(24.5)	浅黄 ～暗灰色	口縁部「く」の字形に屈曲し、端部は外側に肥厚させる。体部は球形をなす。	表面摩擦。外面ハケ成形の後ナデ仕上げか？内面ハケ状の痕跡があるがきらかでない。ナデ仕上げを行っている。	長石・チャートの小石粒含む。
82	(口縁)	(12.1)	(2.75)	浅黄色	口縁部上方にのび、端部外側に肥厚し、平面をつくる。	内面ヨコナデ。外面縦方向のハケメ(6本/cm)の後ヨコナデ。	
83	甕	(12.3) 腹径 (17.6)	(15.65)	にぶい褐 ～黒色	口縁部「く」の字形に屈曲する端部に凹みをつくる。体部球形。	口縁部ヨコナデ。体部内面ユビ成形、外面ハケメ(7本/cm)で整形。	内面下半に炭化物、外面にはスス付着。

No.	器種	法 量	色 調	形態の特徴	技 法	備 考
		口徑 底径	高 度			
84	(底部)	底径 (2.9)	(2.0) 断) 灰白色 灰黄褐色	小型の突出した平底。	ユビナデ調整。	クサリレキ・チャート・黒雲母含む。
85	壺?	底径 4.7	(2.55) 内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙 ~黒色	平底。	内外面、丁寧なナデ仕上げ。 底部再成形。朱が焼かれていた可能性高い。	雲母・長石・酸化鉄少量含む。
86	(底部)	底径 (4.8)	(2.95) 内) 灰白色 外) 灰白~橙色 断) 灰~褐灰色	平底。	表面磨滅。ユビナデか?	
87	(底部)	底径 2.45	(3.1) 内) 浅黄色 外) 灰白 ~褐灰色	中央に凹みを有するドーナツ状の底。	内面ハケで整形の後ナデ。 外側ナデ調整。	2次施成? 5mmの石英粒含む。
88	(底部)	底径 (5.2)	(5.45) にぶい黄橙 ~褐灰色	平底。体部まっすぐ斜め上方にのびる。	内面不定方向のヘラケズリ。 外周縦方向のハケメ(9本/cm)。底部ユビナデ仕上げ。	5mm大の石英粒、チャート粒など多く含む。
89	高杯	(13.8)	(3.75) 浅黄橙色	杯部に段をもって、まっすぐ斜め上方にのびる。口縁端部は外側に肥厚させる。	ヨコナデ。	
90	高杯	—	(3.75) 内) 灰白色 外) 灰白~灰色	杯部に棱(突帯?)をもつ。	内面ナデ調整。外面ヨコナデとユビナデ調整。	クサリレキ含む。
91	高杯	(15.8)	(3.85) 浅黄~橙色	杯部彎曲しながら斜め上方へのび、口縁端部を外反させる。	内面ヨコナデ。外面ハケメ(6本/cm)の後ヨコナデ。	チャート・長石の砂粒含む。
92	高杯	(14.4)	(4.0) 灰オリーブ色	杯部ゆるやかに屈曲し、斜め上方にのび、口縁端部やや尖り気味におさめる。	口縁部内面ヨコナデ、ナデ調整。外周斜め方向のハケメ(5本/cm)の後ナデ調整。	
93	高杯	(14.0)	(4.5) 灰黄 ~暗灰色	杯部ゆるやかに屈曲し、斜め上方に外反気味にのびる。口縁端部外側につまみ出る。柱状部との接合部で割れている。	内面ヨコナデ。外面ハケメの後ナデ調整。やや粗いところ。	石英・長石の砂粒含む。黒く焼成してある部分あり。
94	高杯	(10.6)	(4.75) 浅黄 ~黄灰色	杯部内壁しながら斜め上方にのび、口縁端部外反し、尖り気味におさめる。	口縁端部ヨコナデ。他のユビデナデで仕上げている。	長石含む。
95	高杯	(19.9)	(4.4) 浅黄色	杯部ゆるやかに斜め上方にのび口縁端部に外反させる。	口縁端部ヨコナデ。内面ヨコナデの後ナデ調整。外面ヘラで調整。	長石含む。
96	高杯	(19.7)	(4.8) 内) 灰黄 ~黒褐色 外) 灰白~ 灰黄褐色	杯部ほぼ水平にのび、ゆるやかに屈曲して外反する。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ。内面ナデ調整。外面上半周方向のハケメ(7本/cm)整形。下半ヘラケズリの後ナデ。	長石・雲母・石英の砂粒含む。
97	高杯	18.6	(5.15) にぶい橙色	杯部ほぼ水平にのび、ゆるやかに屈曲して口縁端部は外反させる。	口縁部ヨコナデ。内面ヘラナデ調整。外面上半周方向のハケメ(7本/cm)整形。下半ヘラナデ調整。	

No.	器種	法量 口径 巻高		色調	形態の特徴	技法	備考
98	高杯	(17.8) 腹径 13.4	(13.7)	浅黄～ にぶい黄色	杯部ほぼ水平にのび、屈曲して斜め上方に外反する。中空の脚注に屈曲して外方へ聞く脚台、底部は丸くおさめる。	縦方向のヘラミガキ。裾部外面、不定方向のヘラミガキ、内面はその後ナデ調整。	長石・チャートの砂粒合む。
99	器台	(17.8)	(6.0)	灰白色	上台部外反し、口縁端部わずかに上方に肥厚する。	ナデ調整。口縁部はヨコナデ。	クサリレキ含む。
100	器台	(32.3)	(10.55)	内) 灰白 ～暗灰色 外) 灰白 ～灰黄褐色	上台部まっすぐ斜め上方にのび、口縁端部外側へつまみ出し凹穂をつくる。大型品。	ナデ調整。口縁部はヨコナデ。	
101	高杯	(13.2)	(4.65)	浅黄色	杯部ゆるやかに内唇しながらのび、口縁端部尖り気味におさめる。	表面磨滅気味だが、ナデ調整と思われる。	
102	高杯	(16.2)	(5.3)	にぶい黄 ～黒色	杯部などらかに斜め上方へのびる。口縁端部やや尖り気味におさめる。	口縁部ヨコナデ。内面板ナデ、外面はユビナデ調整。	黒庭か？墨く焼けている。
103	高杯	(13.2)	(10.8)	内) 浅黄色 外) 浅黄 ～黄灰色	杯部斜め上方にのび、ゆるやかに屈曲する。口縁端部、外側につまみ出す。脚注部は中空。	口縁部ヨコナデ。内面不定方向のナデ、外面ハケ整形の後ユビナデ仕上げ。	
104	高杯	—	(3.7)	内) 黄灰色 外) 浅黄色	平坦な杯部。脚部内面つけねに接合時の粘土残る。	ナデ調整。円盤充填法。	
105	高杯	—	(5.1)	灰白色	中実の脚部。	ナデ調整。	布留式。
106	高杯	底径 (10.7)	(3.95)	内) 灰白 ～暗灰色 外) 灰白色 断) 黒色	中空の脚注部からほぼ垂直に屈曲する裾部。裾部上方につまみ上げる。	ユビナデ調整。裾部外面縦方向のハケメ(5～7本/cm)の後ナデ。	裾部内面黒斑。
107	高杯	底径 (12.0)	(2.1)	灰黄～黒色	脚部ゆるやかに斜め下方に下る。	ナデ調整。	黒く焼けている。
108	高杯	底径 (11.6)	(7.4)	浅黄褐～ にぶい褐色	脚部から斜め下方にゆるやかに下り、裾部は反り気味。裾部は下へつまみ出す。	ナデ調整。裾部ヨコナデ。	
109	高杯	(21.8)	(6.4)	内) 浅黄 ～黒褐色 外) 灰白色	杯部まっすぐ斜め上方にのび、口縁端部やや角張り気味におさめる。中程に沈線をもつ。	ヨコナデ。内面磨滅気味。	クサリレキ・全型合む。
110	台付鉢 (脚台)	柄径 7.25	(5.2)	黒褐～褐灰 ～褐色	中実の脚注部に太短い裾部をもつ。	ナデ調整。	
111	器台	柄径 (24.1)	(4.5)	内) 浅黄色 外) 黑灰色	裾部ゆるやかに斜め下方に下り、脚部下方に肥厚する。	内面ユビ成形の後ヨコナデ、外周ヨコナデ。	

第3表 須患器観察表

No.	器種	法量 口径 器高	色調	形態の特徴	技法	備考	
122	杯蓋	(12.4) (4.25)	明青灰 ~灰白色	天井部はやや丸味をもつ。天井部と口縁部をわける稜は鋭く細い。口縁部は直下、端部は細く平面をなす。	回転ナデ調整。天井部の1/2を回転ヘラケズリ。	外面灰かぶり。	
123	杯蓋	(12.5) (4.25)	灰~灰白色	天井部は扁平、天井部と口縁部をわける稜は鋭く細い。口縁部はやや外反昧に下り、端部は細く平面をなす。	回転ナデ調整。天井部2/3を回転ヘラケズリ。内面天井部仕上げナデ。	天井部外面 灰かぶり。 笠型は厚い。	
124	杯蓋	11.9	4.65	灰~灰白色	天井部は丸味をもち、天井部と口縁部をわける稜は鋭く細い。口縁部は直下し、端部は平面をなし外反する。	回転ナデ調整。天井部2/3を回転ヘラケズリ。	天井部外面 灰かぶり。
125	杯蓋	(11.8)	4.9	におい黄模 ~灰色	天井部はやや丸味をもち、天井部と口縁部をわける稜は廿く細い。口縁部は直下し、端部は段有をする。	回転ナデ調整。天井部2/3を回転ヘラケズリ。	焼成不良 (酸化状態)
126	杯蓋	(14.4)	(3.3)	灰~ 明青灰色	大型化。天井部と口縁部には深い後縫で再される。口縁部は直下し、端部は平面をなし、外反する。	回転ナデ調整。	外面灰かぶり。
127	杯蓋	(12.3)	(4.25)	暗灰 ~灰白色	天井部は丸味をもつ。口縁部はなだらかに下り、端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。天井部2/3を回転ヘラケズリ。	
128	杯蓋	(13.8)	(3.25)	暗灰色	半らな天井部からなだらかに口縁部に下りる。端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。天井部2/3を回転ヘラケズリ。内面天井部仕上げナデ、ユビオサエ痕あり。	外面窓壁付着。
129	杯蓋	(14.0)	(3.3)	暗灰~灰色	やや平らな天井部からなだらかに下り、口縁部は、わずかに外反する。端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。天井部回転ヘラ切り後ナデか?	外面灰かぶり。 東播浜 (粘土から)
130	杯蓋	(16.0)	(3.7)	灰色	やや平らな天井部からなだらかに口縁部に下りる。端部は段有をする。	回転ナデ調整。天井部は1/2を回転ヘラケズリ。	
131	杯蓋	(16.0)	(3.7)	暗灰 ~灰白色	半らな天井部からなだらかに口縁部に下りる。端部は明瞭な段をもつ。	回転ナデ調整。天井部は1/2を回転ヘラケズリ。	灰かぶり (外面の一部自然釉)
132	蓋	(17.1) つまみ 径 (2.85)	3.3	灰~灰白色	天井部からなだらかに口縁部に下り、端部は下方に窪くつまみ出す。天井部に鉗状のつまみを付す。	回転ナデ調整。天井部2/3を回転ヘラケズリ。	外面灰かぶり。
133	蓋	(11.4)	(3.5)	灰色	口縁部はなだらかに下り、端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
134	蓋	(12.2)	(4.2)	灰~ オリーブ灰色	丸味のある天井部から、内傾しながら口縁部に下る。端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。天井部2/3を回転ヘラケズリ。	外面灰かぶり、自然釉。

No.	器種	法 蓋 口径 高さ	色調	形態の特徴	技法	備考	
135	杯身	(11.4) (5.05)	灰オリーブ ～灰白色	口縁部は垂直気味に立ち上がり、端部は細く平面を成す。受部はやや斜め上下にのびる。底部は丸味をもつ。	回転ナデ調整。天井部2/3を回転ヘラケズリ。	やや焼成不良。	
136	杯身	(11.8) (4.65)	灰～灰白色	口縁部はほぼ垂直気味に立ち上がり、端部は平面を成す。受部は水平にのび、丸くおさめる。	回転ナデ調整。底部は回転ヘラケズリ。一部その後、斜め方向のヨコナデの痕跡。	外面底部から受部まで自然釉。	
137	杯身	(10.8) (4.45)	暗緑灰 ～灰白色	口縁部は内傾しながら上方に立ち上がり、端部は細く平面を成す。受部は水平にのび、丸くおさめる。	回転ナデ調整。底部カキメを施す。	外面底部灰かぶり。	
138	杯身	(14.3) (4.05)	明緑灰～灰 ～灰白色	口縁部はほぼ垂直気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。	外面口縁部自然釉。	
139	杯身	(15.0) (2.7)	灰白色	口縁部内傾気味に短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。		
140	杯身	(14.9) (4.5)	灰～ 暗緑灰色	口縁部は内傾気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。受部は上方にのび、丸くおさめる。底部やや扁平気味。	回転ナデ調整。底部1/2を回転ヘラケズリ。	外面灰かぶり、自然釉。	
141	杯身	(12.2) (4.2)	灰～灰白色	口縁部は端部に短く内傾し、端部を丸くおさめる。受部も短く斜め上方に丸くおさめる。底部は丸味をもつ。	回転ナデ調整。底部1/2を回転ヘラケズリ。底面内面不定方向のナデを施す。	外面底部灰かぶり。	
142	杯	(10.6)	3.1	灰～灰白色	口縁部はやや内傾気味に斜め上方にのび、端部は丸くおさめる。底部は平底。	回転ナデ調整。底面回転ヘラ切り未調整。	外面底部灰かぶり。
143	杯	(9.8)	(2.9)	灰色	口縁部内傾気味に斜め上方にのび、端部は外向きに尖り気味におさめる。底部は平底。	回転ナデ調整。底面回転ヘラ切りののち一部ナデ。	高丘陵か？
144	蓋	つまみ 径 (2.9)	(3.05)	灰色	天井部は丸味をもつ。倒伏のつまみを付す。	天井部回転ヘラケズリ。つまみ貼り付けのナデ。	つまみに自然釉。
145	高杯	(10.4)	(3.1)	暗緑灰 ～灰色	口縁部斜め上方にのび、端部は段をもつ。受部は短く水平にのび、尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。	外面灰かぶり。
146	高杯	(10.9)	(3.4)	灰～灰白色	口縁部斜め上方にのび、端部は水平をもつ。受部は短く尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。	外面自然釉。
147	高杯	(10.3)	(3.7)	灰色	口縁部丸味をおびて斜め上方にのび、端部は段をもつ。受部は短くおさめる。	回転ナデ調整。	
148	高杯	(10.1)	(6.0)	暗灰～灰～ 灰白色	口縁部ほぼ垂直にのび、端部は丸くおさめる。口縁部と底部の接合部に凹陥をもつ。底部は丸味をもつ。三方の方形透孔の痕跡あり。	回転ナデ調整。底面外面にカキメを施す。	灰かぶり。

No.	器種	法量		色調	形態の特徴	技法	備考
		口径	容高				
149	高杯	底径 (10.8)	(5.6)	暗緑灰 ~灰白色	短く太い脚部で脚端端面に棱を成す。三方に方形透孔をもつ。	回転ナデ調整。脚部外面にカキメを施す。	外面自然釉。
150	高杯	—	(5.0)	暗青灰色	扁平な底部に、方形の透かしを三方に穿つ脚部をもつ。	回転ナデ調整。	
151	高杯	—	(4.75)	灰色	扁平な底部に円形透かしを穿つ脚部をもつ(何方向かは不明)。	回転ナデ調整。	外筒灰かぶり。
152	高杯	底径 (8.6)	(4.05)	灰色	短く広がる脚部で端部は内側に折り曲がる。三方に方形透孔をもつ。	回転ナデ調整。	
153	高杯	(9.6)	(4.9)	灰白色	短く広がる脚部で脚端端面に鋭い棱をもち、段をつくる。四方に方形(三角形)透孔をもつ。	回転ナデ調整。	
154	壺	(11.6)	(2.9)	灰白色	口縁部外反しながら斜め上方にのび、端部は折り込み断面三角形をつくる。	回転ナデ調整。	
155	壺	—	—	明オリーブ 灰色	口縁部は外反しながらのびる。4条の凹線をもつ。端部は欠損。	回転ナデ調整。外面8条と15条の波状文を施す。	
156	壺	—	—	灰~黄灰 ~灰白色	底部は丸味をもつ。	外面平行タタキのちカキメを施す。内面同心円文のタタキ、底部はナデ調整。	塊成ムラあり。
157	壺	(9.3)	(3.5)	灰色	口縁部斜め上方にのび、端部は平面をつくる。その中程に鋭い突起をもつ。	回転ナデ調整。外面に4条と7条の波状文を施す。	内面灰かぶり。
158	壺	底径 (10.3)	(6.5)	暗灰~明オ リーブ灰色	体部はほぼ球形をなす。その中央に円孔を穿つ。	回転ナデ調整。外面下半回転ヘラケズリ。	
159	壺	底径 (11.6)	(8.15)	暗灰~ ~ぶい赤褐 ~灰白色	体部はやや肩を張る球形をなす。もっとも弱の張った部分に円孔を穿つ。	回転ナデ調整。外面下半回転ヘラケズリの後ナデを施す。内面は放射状にヘラナデ調整。	外面灰かぶり。
160	器台	—	—	黒褐 ~灰白色	脚部「ハ」の字形に開く。一条の凹線溝。	回転ナデ調整。外面に柳描点文を施す。	外面自然釉。
161	器台	—	(3.45)	灰~ オリーブ灰 ~白色	わずかに丸味をおびた台部に脚部を付す。脚部には3条以上の突起を付すと思われる。	台部外画格子タタキメ、内面は自然釉で不明。脚部との接合の為に溝をつくる。	内面自然釉、窓附着。
162	瓶	—	—	灰色	底部に把手を付す。詳細不明。	内面同心円分のタタキメ、外周はカキメを施す。把手貼り付けの為のナデ調整。	
163	提瓶	—	—	暗灰 ~灰白色	浅く屈曲する鉤形の耳を付す。	内面ナデ調整。外面不明。	外面白く灰かぶり。
164	提瓶	—	—	灰~灰白色	口縁部斜め上方にのび、端部はやや内側に丸くおさめる。	回転ナデ調整。体部内側ユビナデ。	外面灰かぶり、自然釉。
165	提瓶	底径 19.1	(19.4)	灰色	体部前面が丸くふくれ、背面はほぼ平ら。肩の両側に屈曲する鉤形の耳を付す。先端は欠損。	背面は回転ヘラケズリの後ナデ調整。前面中央部を円板で充填し、カキメ調整する。	

No.	器種	法 量		色調	形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高				
166	横瓶	—	—	灰色	丸い脚部。	外面回転ヘラケズリ、カキメを施す。内面回転ナデの後不定方向のナダ調整。	
167	甕	(24.8)	(9.5)	暗灰 ~灰白色	口縁部「く」の字形に外反し、端部近くに突帯を巡らす。端部は上下に引き出し面をつくる。	回転ナデ調整。口縁部に11条の波状文、その下にカキメを施す。体部外面は平行タタキの後カキメを施す。	灰かぶり。
168	甕	(22.5)	(1.9)	暗青灰 ~青灰色	口縁部斜め上方にのび、端部近くに丸珠のある突帯を付す。端部は上下に引き出し段をつくる。	回転ナデ調整。	内面灰かぶり。
169	甕	(24.4)	(4.9)	褐灰~ オリーブ灰 ~灰色	口縁部斜め上方に外反しながらのび、端部は上につまみあげ丸くおさめる。	回転ナデ調整。	内面うすく自然釉。外面自然釉。
170	甕	(22.8)	(2.15)	灰色	口縁部開き気味に斜め上方にのび、端部近くに短く尖り気味の突帯を付す。端部は上下に引き出し丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
171	甕	(14.0)	(2.9)	暗灰色 断) に長い褐色 (サンド イッチ状)	口縁部は外反しながら、斜め上方へのび、端部は上下に引き出し丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
172	甕	—	—	内) 灰~緑灰色 外) 青黒色	口縁部外反気味に斜め上方にのび、端部は上につまみ上げ。断面四角形となる面をつくる。	回転ナデ調整。	内面灰かぶり自然釉。外面自然釉。
173	甕	腹径 (16.0)	(7.4)	青灰~灰色	体部内壁しながらのびる。器壁はやや厚め。	回転ナデ調整。外面1条の波状文を施しその下に浅い沈む線を巡らす。	外面若干灰かぶり。
174	甕	(20.1) 腹径 (33.0)	(33.0)	暗青灰 ~灰白色	口縁部「く」の字形に外反しながらのびる。端部は1条の凹溝が巡り、丸くおさめる。体部はやや肩の張る球形で底部は尖り気味。	口縁部は回転ナデ調整。体部内面は同心円えタタキ、外面は格子目タタキを施す。	外面一部自然釉。

第4表 歴史時代の遺物観察表

No.	器種	法 口径 底径	量 器高	色 調	形態の特徴	技 法	備 考
179	甕	(19.4) 底径 (23.3)	(24.7)	内) 明黄褐色 外) 黄灰~淡黄 ~淡黄色	口縁部ややゆるやかに屈曲し、端部は丸くおさめる。体部やや長めの球形で底部半たい丸底。	口縁部ヨコナデ。内面ナデ調整で外縁斜めから縦に(8本/cm)のハケメを施す。上半はハケメを繰り返し、下半は輪な仕上げ。	
180	(把手)	—	—	淡黄色	角状の把手。	ユビナダ整形。	
181	(把手)	—	—	淡黄褐色	角状の把手で、180よりやや大型。	ユビナダ整形。	
182	(つまみ)	つまみ 種 3.4	(1.4)	内) 淡黄褐色 外) 橙色	鉗状のつまみ。	回転ナデ調整?	磨滅気味。
183	(高台)	底径 (8.6)	(2.1)	橙色	【ハ】の字形にふんばる高台で端部は肥厚し面をつくる。丸く突唇を付す。	回転ナデ調整?	磨滅気味。
184	杯	(13.0)	(3.15)	灰白~ にぶい橙色	口縁部まっすぐ斜め上方へのび、端部や外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ。	
185	(底部)	底径 (13.2)	(1.3)	橙色	平坦な底部に直立する高台を付す。	磨滅の為調整不明。	
186	(底部)	底径 (13.3)	(1.35)	橙色	平坦な底部にやや外向きに直立する高台を付す。	磨滅の為調整不明。	
187	壺 (縁部)	底径 (26.4)	(5.1)	内) 黒色 外) 橙~褐灰色	内側気味にのびる縁部、端部は面をつくる。	ヨコナデ。外面ナデの端明瞭。	内面黒斑。
188	鍋 (口縁)	—	—	内) 橙~ 灰黄褐色 外) 淡黄色	口縁部まっすぐのび、端部やや屈曲外向きに丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ。外縁斜め方向に(7~8本/cm)のハケメ調整。内面ナデか?	外面端部未の焼痕?磨滅気味。クサリレキ食む。
189	壺 (縁部)	—	—	橙~ 淡黄褐色	まっすぐの縁部で、端部は面をつくる。	外面ともにハケメ調整。 外面ヨコ方向の後タチ斜め方向に整形。	埴輪の可能性もあり。
190	蓋	(18.6)	(2.6)	灰オリーブ~灰色	天井部などらかに斜め下方にのびる。口縁部下へ折り込み尖り気味におさめる。縁部近くに丸味のあるかえりをもつ。つまみはあると思われるが欠損。	回転ナデ調整。外面天井部は回転ヘラケズリの後ナデ調整。	
191	蓋	(19.5)	3.95	内) 青灰 外) 暗青灰~灰色	天井部などらかに斜め下方にのびる。口縁部下へ折り込み尖り気味におさめる。宝珠つまみを付す。	回転ナデ調整。天井部外面は回転ヘラケズリ、つまみ貼り付けの為のナデ調整。内面不定方向の仕上げナデ。	外面灰かぶり。
192	蓋	(16.4)	(1.65)	灰白色	口縁部は下へ折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
193	蓋	(14.7)	(2.15)	灰白色	天井部ややくらみゆるやかに斜め下方へ下る。口縁部は下へ折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。天井部外面は回転ヘラケズリで、内面は工具による不定方向の仕上げナデ。	外面白かぶり。

No.	器種	法 量		色 調	形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高				
194	盞 (つまみ)	つまみ 径 (3.75)	—	灰色	平坦な天井部に鉗状のつまみを付す。つまみの中央は凹んでいる。	回転ナデ調整。天井部外面は回転ヘラケズリ、つまみ貼り付けのナデを施す。内面一部ユビオサエ。	
195	杯か皿? (高台)	底径 (12.3)	(1.3)	灰白色	平坦な底部に低く平らな高台を付す。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ。内面粗く仕上げナデ。	7mm大の石粒含む。
196	杯か皿 (高台)	底径 (12.2)	(1.05)	内) オリーブ灰 外) 嘴灰~灰色	平坦な底部に低く直立する高台を付す。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ。内面一方方向の仕上げナデ。	
197	杯	(15.4)	(3.5)	灰色	口縁部まっすぐに斜め上方にのび、端部や外向きに丸くおさめる。	回転ナデ調整。内面仕上げナデ。	
198	杯	(15.7) 底径 (11.6)	(4.05)	内) 灰白色 外) オリーブ灰 ~灰色	口縁部やや聞き気味に斜め上方へのび、端部は丸くおさめる。底部はやや中央が凹み「ハ」の字形の高台を付す。	回転ナデ調整、底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整。内面不定方向のナデとユビオサエ痕がみられる。	外腹灰かぶり。
199	杯	(15.6)	(3.45)	明オリーブ 灰色	口縁部やや聞き気味に斜め上方へのび、端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
200	小皿	(9.8)	(2.45)	内) 灰色 外) 灰~灰白色	口縁部は直立気味に上方へのび、端部を外反させて丸くおさめる。底部は平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ。	外腹ひだすき。證明皿か?
201	小皿	(10.2)	(2.4)	灰色	口縁部斜め上方へのび、端部は外反させて丸くおさめる。底部は平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ。	外腹ひだすき。證明皿か?
202	盞	—	—	内) 灰オリーブ 色 外) 灰~灰白色	肩部に短く丸く突帯を付す。	回転ナデ調整。	
203	小瓶 (底部)	5.7	(3.4)	内) 灰白色 外) 灰~灰白色	体部内縁気味に上方へのびる。底部は平底。	回転ナデ調整。底部外面ヘラ切りの後ナデ調整。	
204	台付壺?	—	—	灰色	やや丸味のある台部に脚部を付す。	内面同心円文タタキ。外面ナデ調整と脚部捺合のためのナデ。	
205	杯	(14.8)	(2.65)	内) オリーブ灰 色 外) 灰色	口縁部は直立気味に斜め上方にのび、端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	内面自然釉。
206	高杯?	底径 (16.7)	(4.5)	内) 緑灰~ 明緑灰色 外) 青灰色	縁部やや丸味をもって下る。縁部は平面をつくる。器壁は厚い。	回転ナデ調整。	

# 図版



調査地全景



7・9 トレンチ東壁



出土 遺 物



出土 遺 物 (土師器)

図版 1



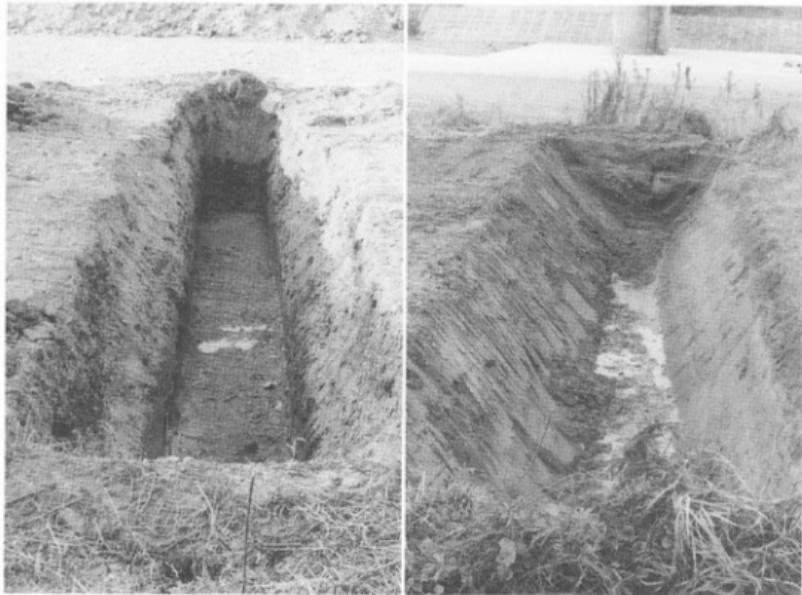
西河原遺跡空中写真（国土地理院撮影）



調査地遠景（南から）



調査前の状況（1～3 ドレンチ付近・北西から）



1 トレンチ (東から)

3 トレンチ (東から)



4 トレンチ北壁



6 トレンチ北壁



7 トレンチ東壁



7・9 トレンチ東壁



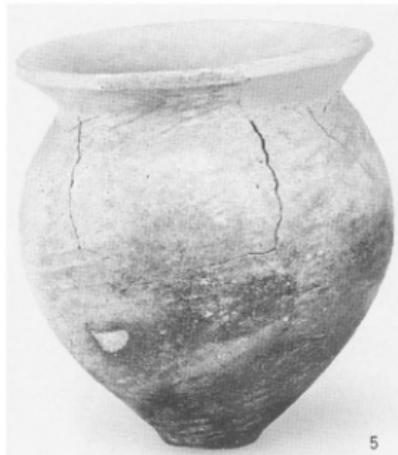
埋め戻し風景



調査地遠景（南から）



出土 土師器



5

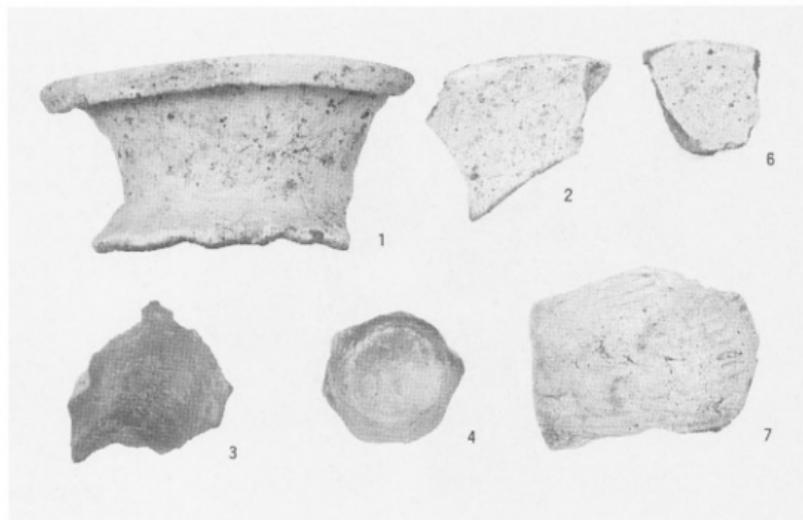


6

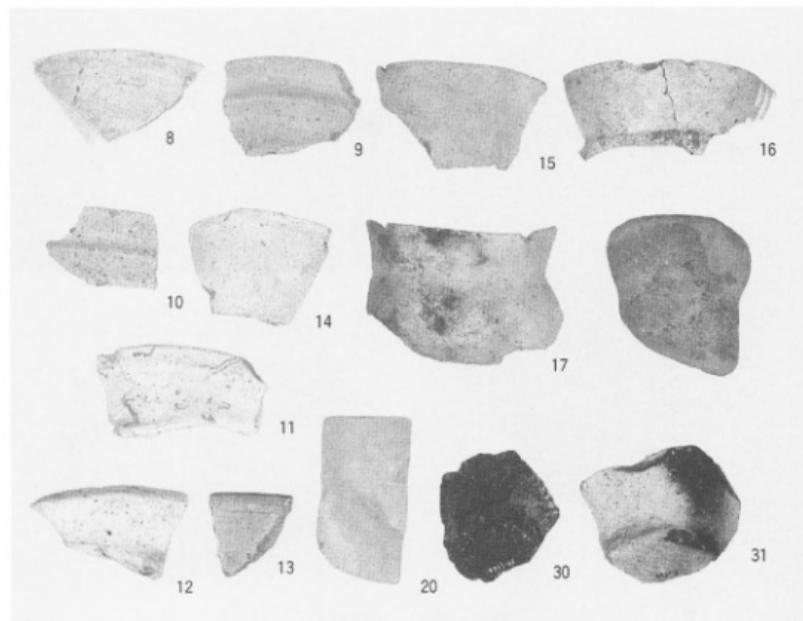


18

弥生土器(1)・土師器(1)

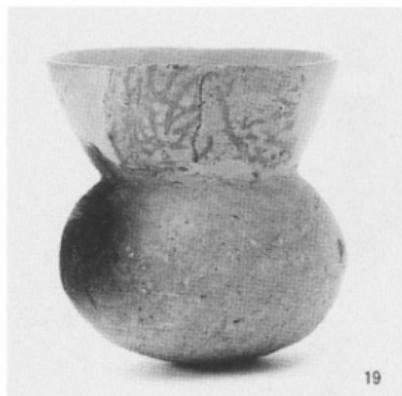


弥生土器(2)



土師器(2)

図版 9



19



21



22



24

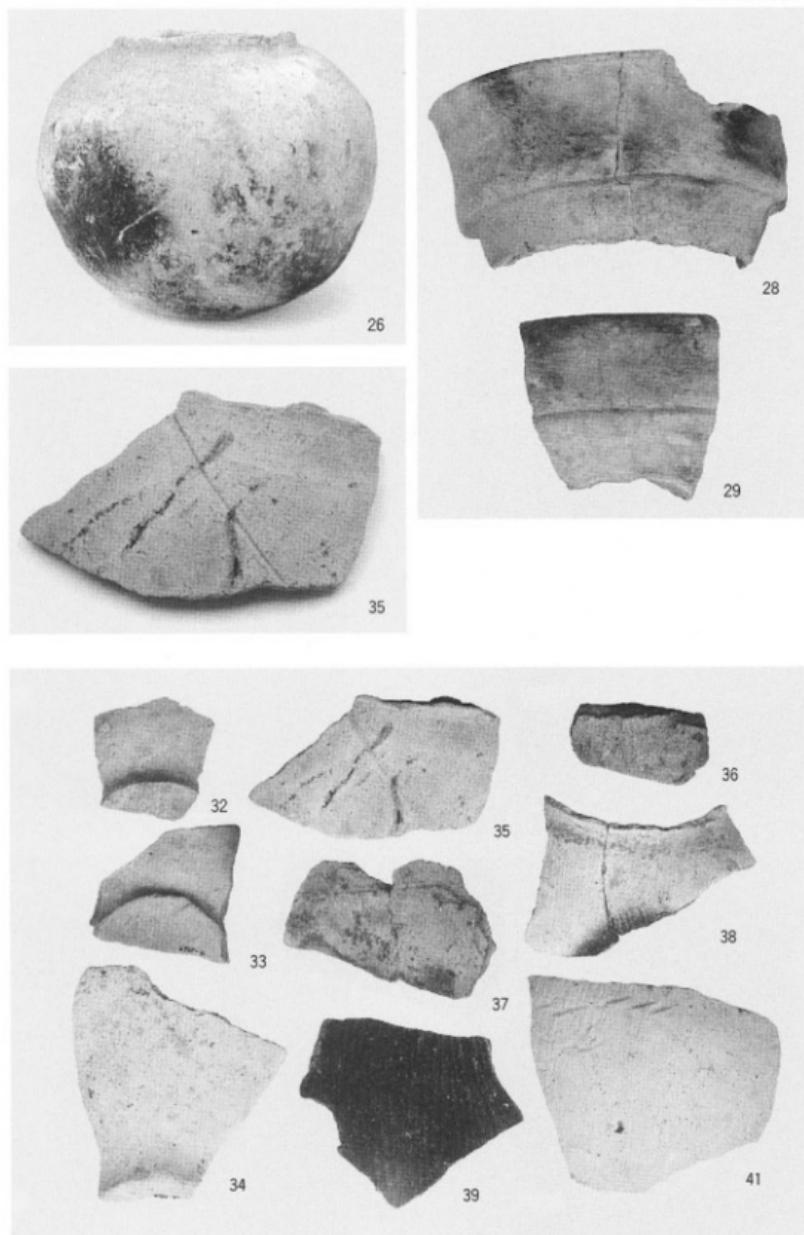


23

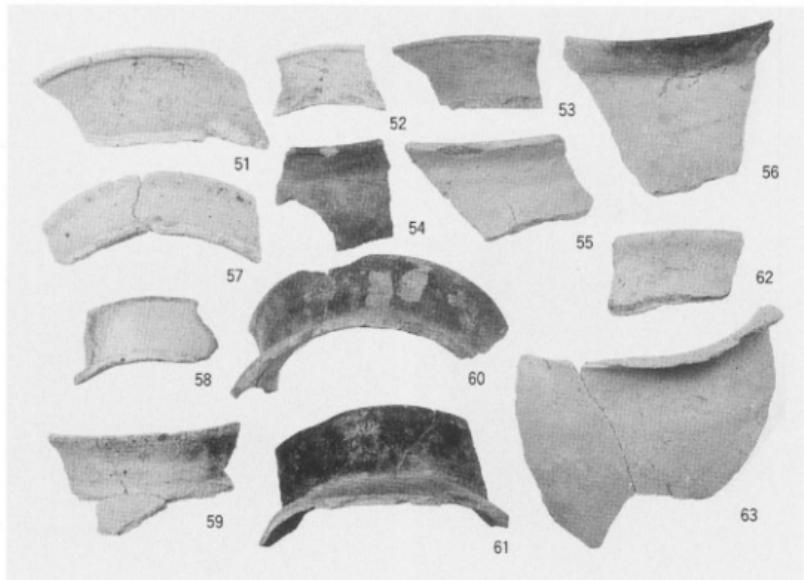
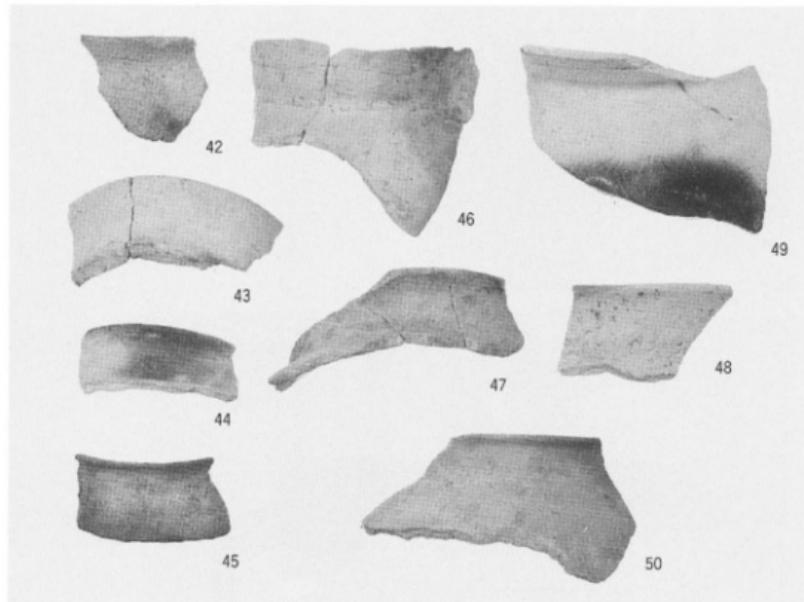


25

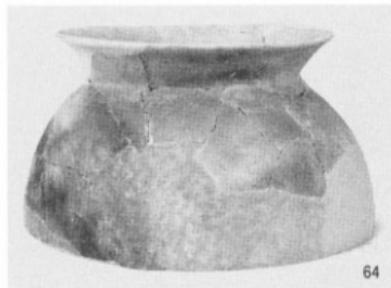
土 師 器(3)



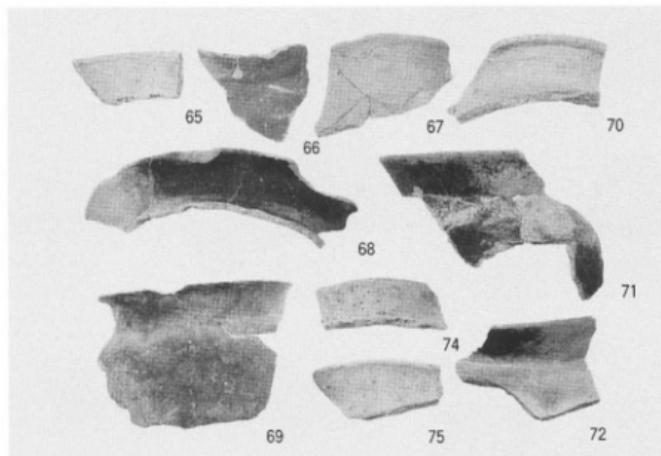
土 師 器(4)



土 師 器(5)



64



65

66

67

70

68

69

74

75

71

72

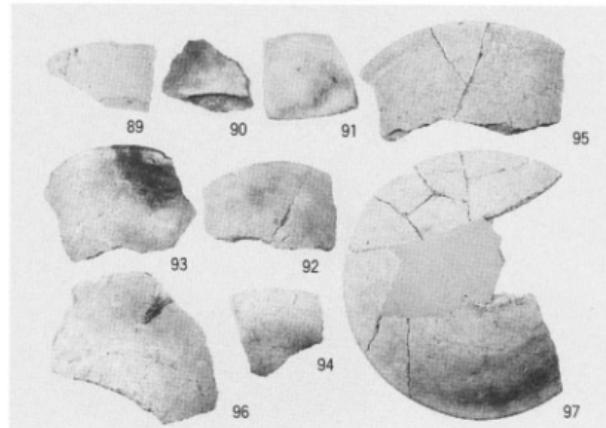
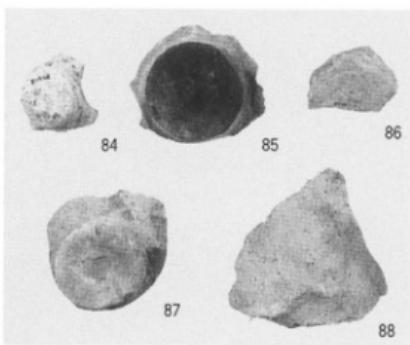
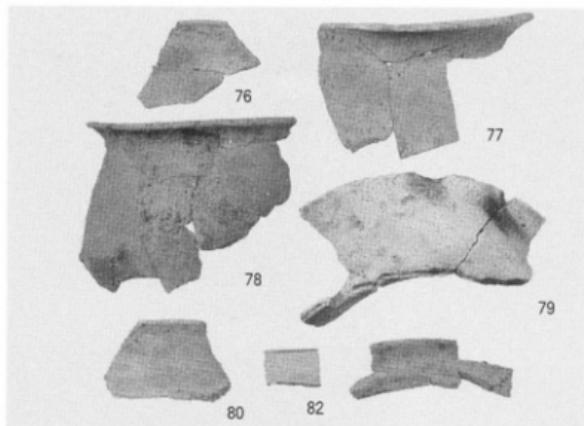


73

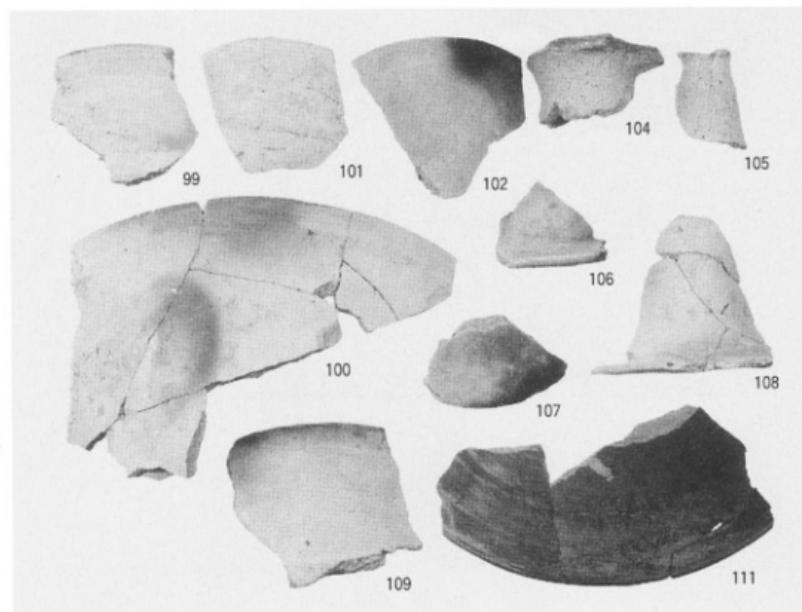
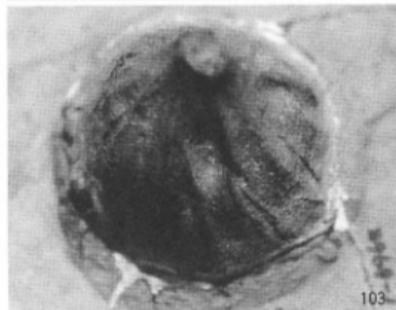
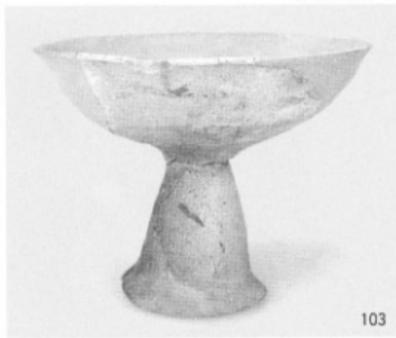


81

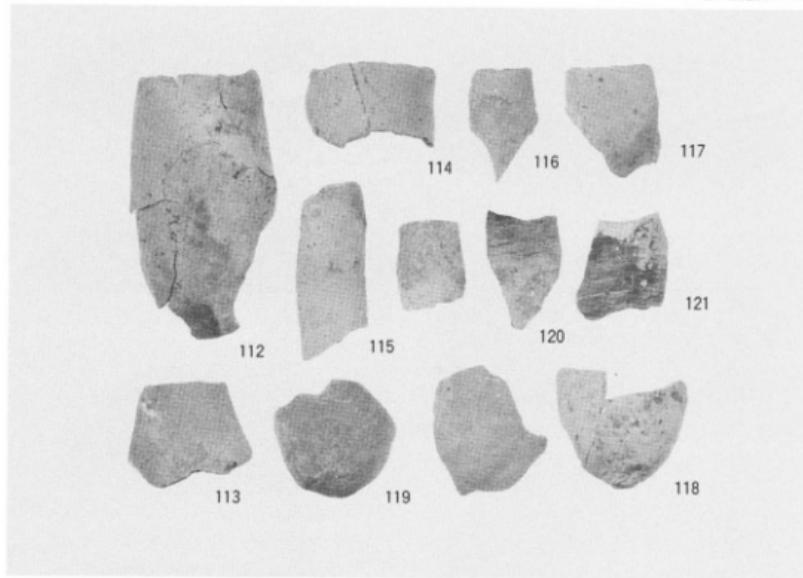
土 師 器(6)



土 師 器(7)



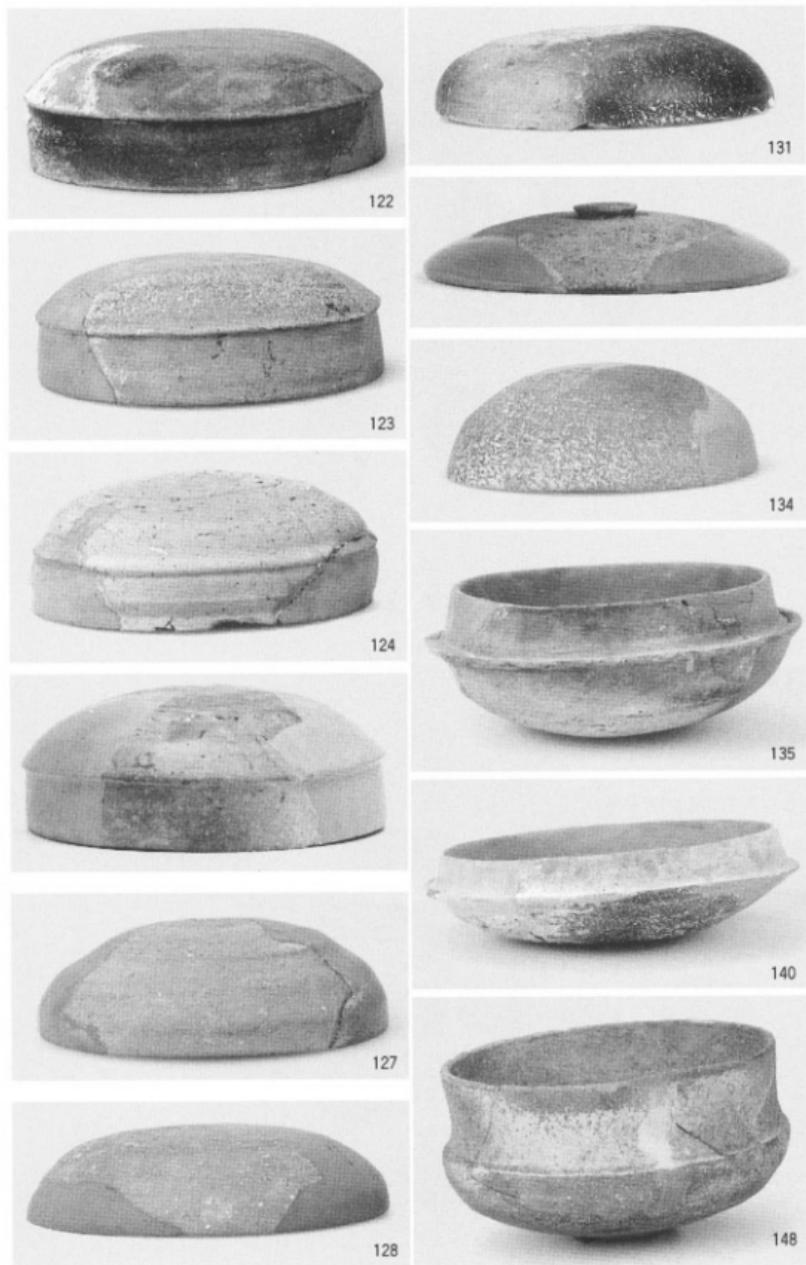
土 師 器(8)



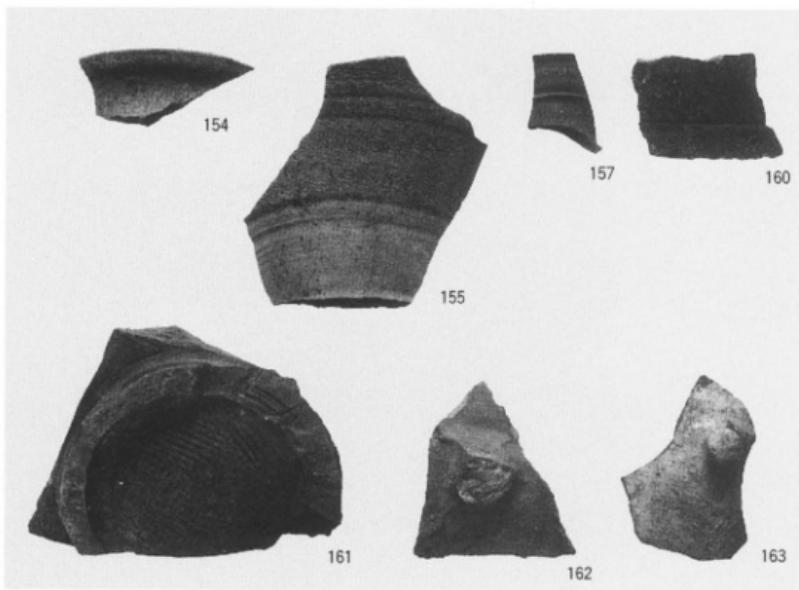
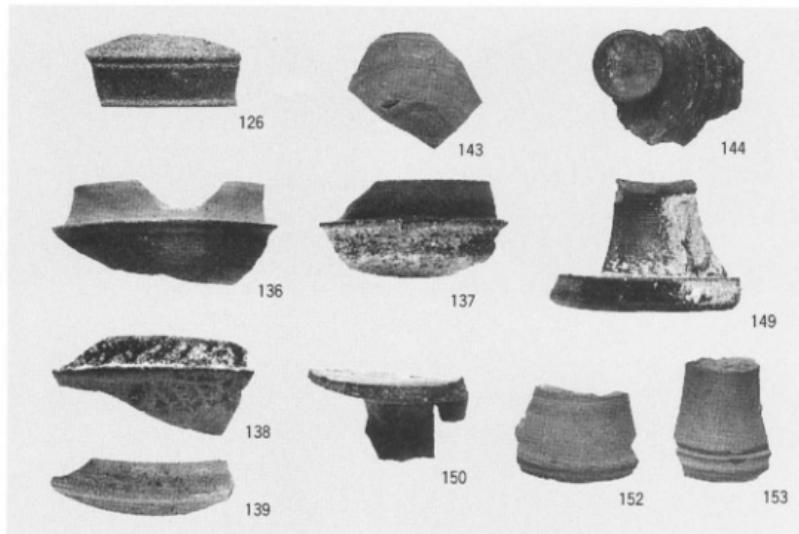
製 塩 土 器



須 恵 器(1)



須 恵 器(2)



須 恵 器(3)



158



159



165

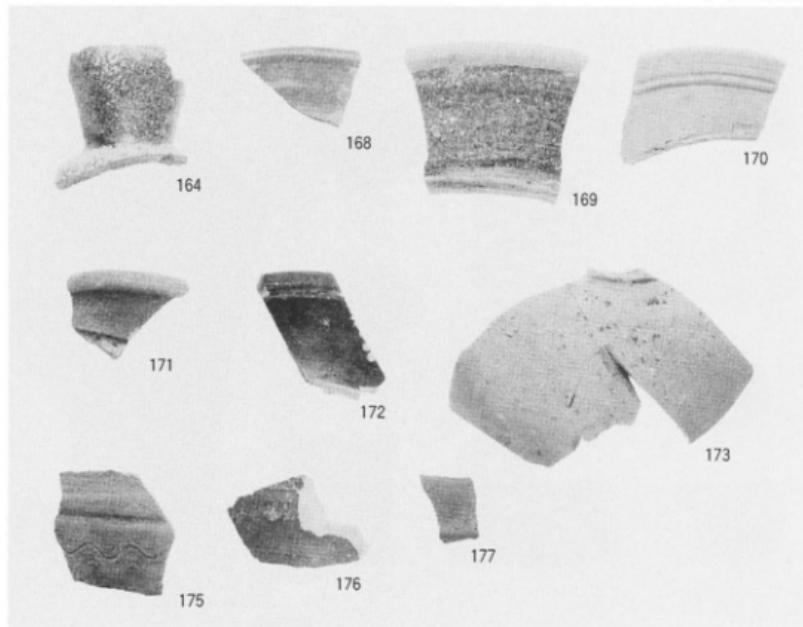


165

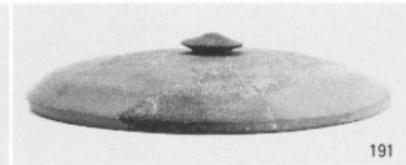
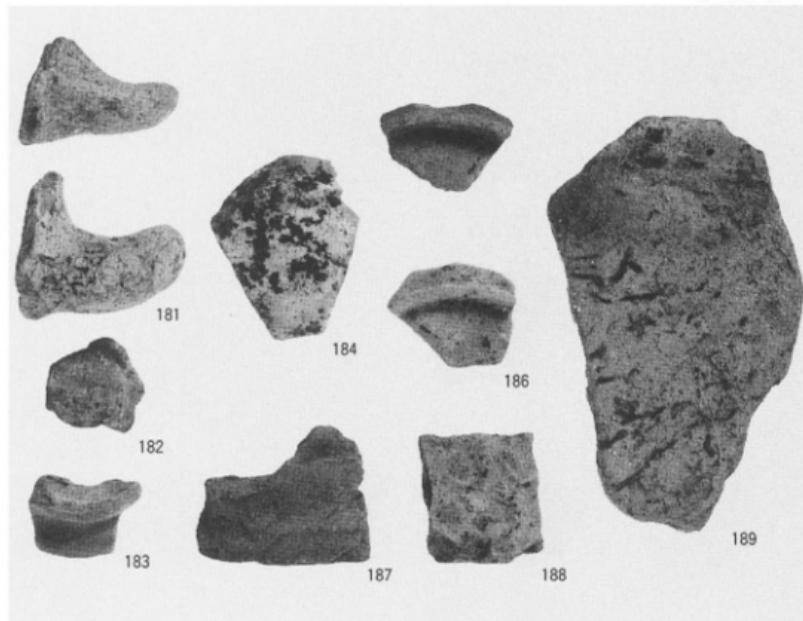


169

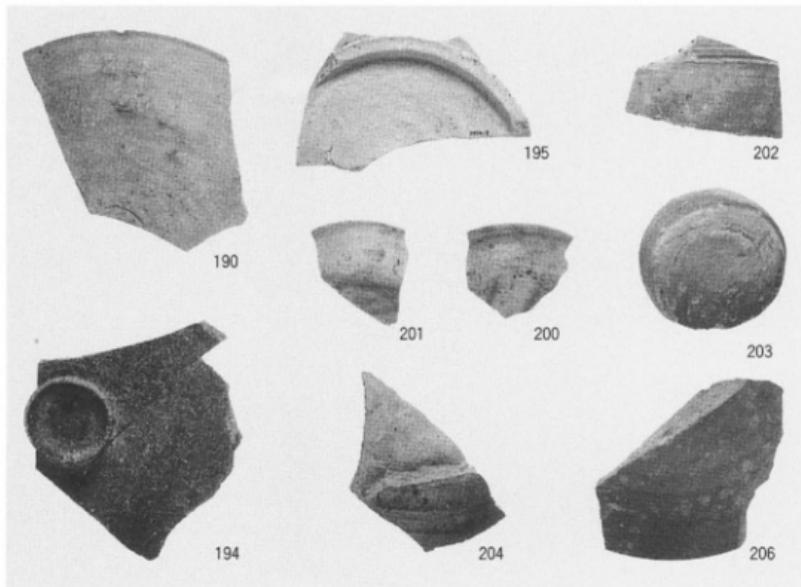
須 恵 器(4)



須 恵 器(5)



歴史時代 出土遺物(1)



歴史時代 出土遺物(2)

---

兵庫県文化財調査報告 第112冊

神戸市西区

## 西河原遺跡

1992年3月31日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5  
TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷 交友印刷株式会社  
〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4-5

---